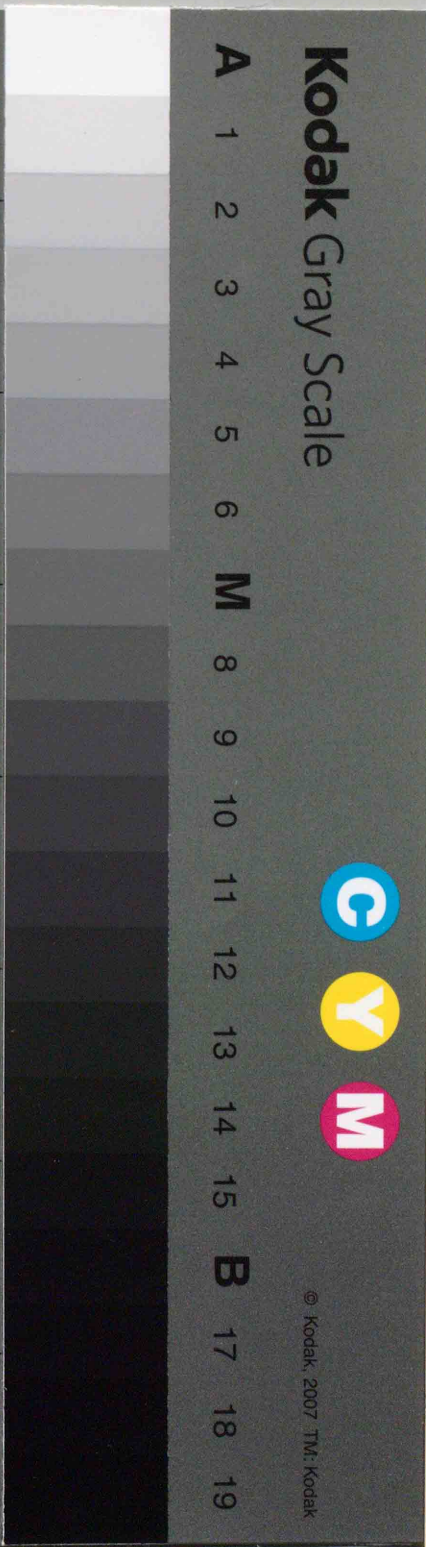
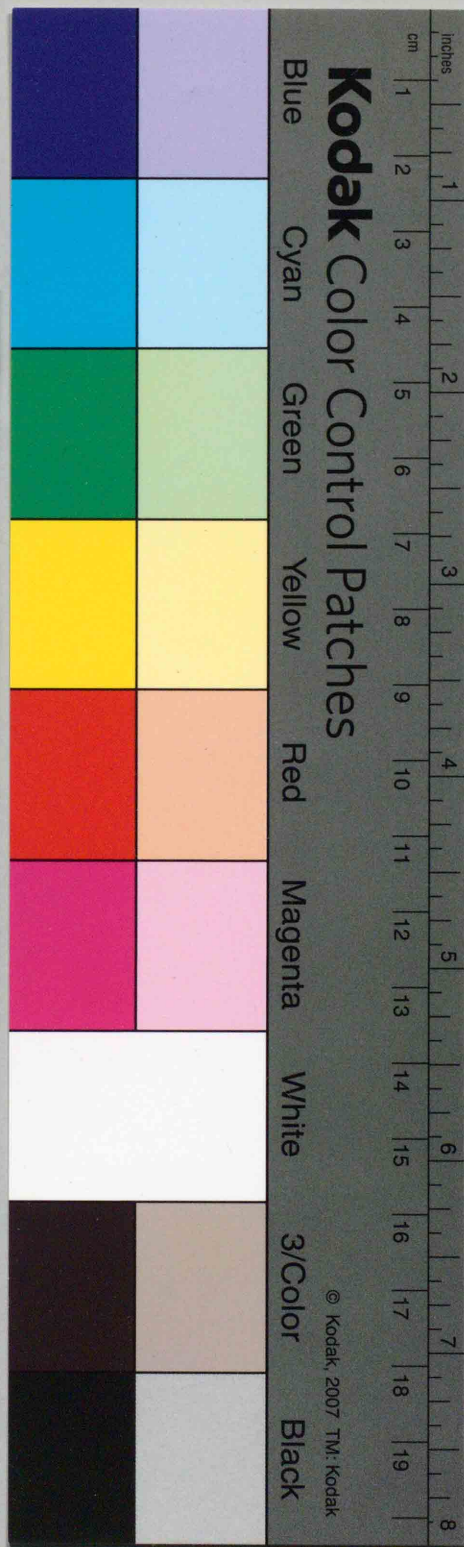
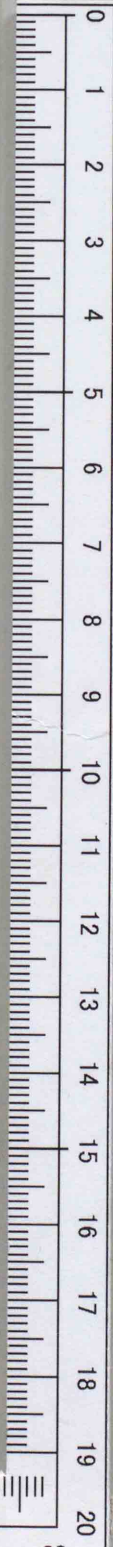


中學國文讀本

弘文館編纂

卷十

375.9
K02
資料室



30307



教科書文庫

| |
|---------|
| 3 |
| 810 |
| 41-1902 |
| 20000 |
| 23886 |

M35
1902.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3258
K02

教育部省檢定濟 中學教科書 明治三十三年一月十六日

弘文館編纂



東京 弘文館藏版
中學國文讀本

東京

弘文館藏版

中學國文讀本十の卷

目次

| | | | |
|----|-----------------|------|------|
| 第一 | 三種の神器 | 源中親房 | (一) |
| 第二 | 人臣の道 | 同 | (七) |
| 第三 | 和氣清麿 | 長澤伴雄 | (二三) |
| 第四 | 配所の月 | 尾崎雅嘉 | (二七) |
| 第五 | 承久の戦ひ増鏡 | | (二六) |
| 第六 | 新島守同 | | (三二) |
| 第七 | いさよふ月 | 阿佛尼 | (四六) |
| 第八 | 鉢の木謡曲 | | (五五) |
| 第九 | 草枕 身の油長歌、僧辨玉 | 那珂通高 | (六九) |

目次

(十の卷) 一

| | | |
|-----|--------------|-------------|
| 第十 | 雪をめぐる記 | 村田春海 (七六) |
| 第十一 | 歌がたり | 同 (七九) |
| 第十二 | 埋み火 | 清水瀧臣 (八三) |
| 第十三 | 臨瀛閣の記 | 富士谷成章 (八五) |
| 第十四 | 本居ぬしのもこにおくる橘 | 千蔭 (八九) |
| 第十五 | 千蔭ぬしへの返りごこ | 本居宣長 (九二) |
| 第十六 | 古文の評 | (九六) |
| 第十七 | 卒業の學生を祝ふ | 久米幹文 (一〇二) |
| | 太平の曲短歌 | |
| | 文章論口語文 | 小中村清矩 (一〇七) |



中學國文讀本十の卷

弘文館編纂

第一 三種の神器 源親房

天津彦彦火瓊々杵尊、天孫とも、皇孫とも申せり。皇祖天照大神、高皇産靈尊、いつきめぐみましく、て葦原の中州の主となして、天降し給はんこし給ひき。爰に、其の國の邪神あれ、たやすく下り給ふこご難かりければ、天稚彦と云ふ神をくだして見せたまひしに、大女神の女、下照姫にとつぎて、返り事申さず、三ごせになりぬ。依りて、名なし雉をつかはしてみ

せられしを、天稚彦射殺しつ。其の矢、天上にのぼりて、大神の御まへにあり。血にぬれたりければ、怪みたまひて、投げ下されしに、天稚彦、新嘗してふせりける胸にあたりて死にぬ。世に返し矢を忌むは、此の故なり。さらに、又、くださるべき神をえらばれし時、経津主命、武甕槌神、勅りをうけて下りましけり。出雲國に至り、はかせる劍をぬきて、地につきたて、其のうへに居て、大汝神に、大神の勅りを告げしらしめぬ。其の子、都波八重事代主神、相共にしたかひぬと申しぬ。次の子、健御名方刀美神、したかはずして逃げ給ひしを、諏訪の湖まで追ひて攻められしかば、又したがひぬ。かくてもろくの悪神をば罪なへ、順へるをばほめて、天上にのぼりて、返り事申し

給ひき。大物主の神事代主の神、相共に、八十萬の神を率ゐて、天にまうでぬ。大神、ここにほめ給ひて、よろしく、八十萬の神を領して、皇孫を護りまつれとて、返し下し給ひけり。其の後、天照大神、高皇産靈尊、相計りて、皇孫を下し給ひぬ。八百萬の神、勅りを承けて、御供に仕へまつりぬ。諸神の上首、三十二神あり。其の中に、五部の神と云ふは、天兒屋命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉屋命なり。此の中にも、中臣忌部の二神は、むねと、神勅をうけて、皇孫をたすけまもり給ひぬ。又、三種の神寶を授けましましぬ。先、あらかじめ、皇孫に勅りして宣く、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可主之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆、當與天壤無窮者矣。又、大神、御手に、寶鏡をもち

たまひ、皇孫にさづけて祝ひて、吾兒視此寶鏡、當猶視吾。可與同床共殿、以爲齋鏡。このたまひき。八阪瓊の曲玉、天叢雲の劍を加へて、三種とす。又、此のかゝみのごとくに、分明なるを以て、天下に照臨したまへ。八阪瓊のひろがれるがごとく、曲妙を以て、天下をしろしめせ。神劍をひきさげて、不順のものを平けたまへ。と、勅りまし。けるごぞ。此の國の神靈として、皇統一種、たゞしくましますご、まここに、これらの勅りに見えたり。三種の神器、世に傳ふる事、日月星の、天にあるにおなじ。鏡は、日の體なり。玉は、月の精なり。劍は、星の氣なり。ふかきならひあるべきにや。抑、彼の寶鏡は、さきに記せる石凝姥命の作り給へりし八咫の御鏡、玉は、八阪瓊の曲玉、玉屋命の

伊弉諾大神宮

作り給へるなり。劍は、素盞鳴尊の得給ひて、大神に奉られし叢雲の劍なり。此の三種につきたる神勅は、まさしく、國をたもちますべき道なるべし。鏡は、一物をたくはへず。私の心なくして、萬象をてらすに、是非善惡の姿あらはれずと云ふことなし。其のすがたにしたがひて、感應するを徳とす。これ、正直の本源なり。玉は、柔和善順を徳とす。慈悲の本源なり。劍は、剛利、決斷を徳とす。智慧の本源なり。此の三徳を翕せ受けずしては、天下のをさまらんと、まここに、かたかるべし。神勅あきらかにして、詞約やかに、むねひろし。剩へ、神器にあらはしたまへり。いご、かたじけなき事にや。中にも、鏡を本とし、宗廟の正體とあふがれ給ふ。鏡は、明をかたちとせり。心性明かな

れば、慈悲決斷は、其の中にあり。又、まさしく、御影をうつし給ひしかば、ふかき御心をさめ給ひけんかし。天にある物、日月より明かなるはなし。依りて、文字を制するにも、日月を明とすこいへり。我が神、大日の靈にましますば、明德を以て照臨し給ふこと、陰陽におきて測りがたし。冥顯につきてたのみあり。君も臣も、神明の光胤をうけ、或は、まさしく、勅りをうけし神達の苗裔なり。誰れか、是れをあふぎ奉らざるべき。此の理をさとり、其の道にたがはずば、内外典の學問も、爰に、極るべきにこそ。されど、此の道のひろまるべき事は、内外典流布の力なりと云ひつべし。魚をうる事は、網の一目によるるべし。衆目の力なければ、これを得る事かたきが如し。應神天

光明照臨
全別見彦那公

内典
外典
御まじり

第二 人臣の道

同

皇の御代より、儒書をひろめられ、聖德太子の御時より、釋教をさかりにし給ひし、これみな、權化の神聖にましますば、天照大神の御心をうけて、我が國の道をひろめ、ふかくし給ふなるべし。

凡そ、王土にはらまれて、忠を致し、命をすつるは、人臣の道なり。身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、其の跡をあはれびて賞せらるゝは、君の御政なり。下として、きはひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望みを致すこと、みづから危むるはしなれど、前

禁制の布令

詔の旨を宣、達する事

車の轍を見ることは、誠にありがたきならひなりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば誠められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して、身を亡し、家を失ふためしあれば、いましめらるゝもこそわりなり。

鳥羽院の御代にや。諸國の武士の源平の家に屬することを止むべしといふ制符、たびくありき源平、久しく武を執りて仕へしかども、事あるときは、宣旨を賜りて、諸國のつはものを召し具しけるに、近代となりて、やがて、かたらはるゝやから、多くなりしによりて、此の制符は下されき。果して、今までの亂世の基なれば、いふがひなきことになりけり。

此の頃よりの諺には、一度軍にかけあひ、或は、家の子郎從、節

月事目ヨシ出

箕子を徳とせん者

に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては、日本國を賜へ、もしは、半國をたまはりても足るべからずなど申すめる、誠に、さまで思ふことはあらじなれど、やがて、是れより亂るゝは、しこもなり、又、朝威のかるく、しさも、推し量らるゝものなり。言語は、君子の樞機なりといへり。あからさまにも、君を蔑ろにし、人に驕ることは、あるべからぬことにこそ、さきにも記せる如く、堅き氷りは、霜を履むより至るならひなれば、亂臣、賊子といふものは、其のはじめ、心、言葉を慎まざるより出で来るあり。世の中の衰ふると申すは、日月の光りのかはるにもあらず、草木の色の改まるにもあらず。人の心の、悪しくなりゆくを、末世といへるにや。昔、許由といひける人は、

帝堯の國を傳へんごありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父は、これを聞きて、此の水をだにきたながりて、渡らざりき。其の人の五臟六腑のかはるにはあらじよく、思ひあらはせる故にこそあらめ。猶、行く末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。おほかた、己れ一身は、恩にはほころごも、萬人の怨みをのこすべきことをば、なごか願ざらん。君は、萬姓の主にてましませば、かぎりある地をもちて、限りなき人に分たせ給はんことは、推して量り奉るべし。もし、一國づゝを望まば、六十六人にてふさがりなん。一郡づゝといふごも、日本は、五百九十四郡こそあれ。五百九十四人はよろこぶごも、千萬の人はよろこ

ばじ。況や、日本の中、悉く、みなが望まば、帝王は、いつくを知らせ給ふべきにか。かゝる心のきざして、言葉にも出し、面にも耻づる色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。將門は、比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにもやありけん。昔は、人の正しくて、將門に見もこり、聞きもこりけん。今は、人々の心、かくのみなりにたれば、此の世は、いよく、衰へぬるにや。

漢の高祖の、天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。之れを、三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふごぞ。中にも、張良は、高祖の師として、謀を帷帳の中にめぐらして、勝つごを、千里の外に決するは、此の人なりご宣ひしかご、張良は、驕る

こそなくして、留さいひて、すこしきなる所を望みて封せられにけり。あらゆる功臣、多く亡びしかど、張良は、身を全くしたりき。

近き世の事ぞかし。頼朝の時までも、文治の頃七百九十三年にや。奥の泰衡

を追討せしに、みづから、向ふことありしに、平の重忠七百九十三年が先陣

にて、其の功すくれたりければ、五十四郡の中、いづくをも望

むへかりけるに、長岡長岡の郡七百九十三年さて、極めたる少き所をのぞみ賜

りけるこそ、是れは、人に、ひろく、賞を行はしめんがためにや、

かしこかりけるをのこにこそ。

又、直實平直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、日本第一の

剛の者なり」と書きて賜ひてけり。一こそ、彼の下文をもちて

東鑑文治五年九月也
日ノ條に長岡郡
重忠討つる時
是狭小地也云々

久下直實上田地
平直實
生年三十一歳
生年三十一歳
生年三十一歳

奏聞する人のありけるに、褒美の詞の甚だしきに、與へたる所のすくなき、誠に、名を重くして、利を軽くしける、いみじきこと、口々に譽めあへりける、いかに心得て、ほめけん、いごをかじ。

第三 和氣清麻呂 長澤伴雄

和氣朝臣清麻呂卿は、活目天皇の皇子鐸石別命の御裔にて、高野天皇より、柏原天皇にいたるまで、五代の朝廷に仕へ奉りて、いご忠實に、つごめいそしみ給ひけることは、世人のよく知れるが如し。そが中にも、神護景雲の時、道鏡御門の籠にほこりて、おほけなくも、かしこくも、皇位をかたぶけ奉らん

ことして、密かに、宇佐八幡宮の主神中臣阿曾麻呂と相謀りて、
 事を、神教に託し、御使ひを請ひまつらせたり。こゝに、天皇、清
 麻呂卿を、御使ひことして、筑紫へ、宇佐に遣したまひき。
 其の發途に臨みて、道鏡、ひそかに、清麻呂卿にいへらく、今、宇
 佐の神の勅使を乞ひたまへるは、我れを、皇位に即けんこと
 なり。汝、その意を得てよ。事なりなば、汝に、太政大臣を授けん
 といふ。卿、黙しながら出て給へり。此の時、おもほすむねやお
 はしつらん。一篇の文案をしるして、残し置かれたりけるが、
 今なほ、山神高麗寺高雄寺に、祕め持てりこそぞ。かくて、都に還りまゐりて、
 神憑り語を、ありしまゝにきこえ上げ奉りしかば、道鏡、いた
 く憤りて、卿の本官を解き、また、膺の筋をたちて、大隅國に流

和氣清麻呂の創始
 神代卷第十四

しまゐらせてき。いかにいみじきたふれ業ぞや。これは、續日
 本紀を始め、何くれの書ごにも見えて、大かた、人の知れる
 ことなれば、今さらにいはず。
 あやしきかも、奇しきかも。此の卿の御魂は、や、さばかり、時柄
 を執れる道鏡が威言にも恐れず、みづから、榮爵をも貪らず、
 身を殺すべき咎を知るく、件りのさまなる事行ひ給へる
 よ。忠實心のいたり、雄々しきも、猛しきも、言の葉にかけてい
 はんに餘りある御事なり。もし、卿、私心おはしたらんには、言
 葉の露の一滴に、思ひこみかしこかれど、皇統は、あらぬかたにみだれ
 ゆきなんものを、しかすがに、神の御護りにて、あやまちなか
 りし物から、誠は、卿の倭魂の至りによれるあれば、大凡に思

神代卷第十四
 和氣清麻呂の創始

孝明天皇
嘉永元年正月五日

松花高直一之文録
花の周りよつ

ふべき事ならず。抑、臣下とある徒らの鏡もすべき人、いにしへより、いささはなれど、此の大人にさきだち、此の卿にさし次ぐばかりの人、またあらんやは。
かくて、此の卿の御靈を、故ありて、はやう、高雄寺に齋き祀りたりけるを、こたび、勅使をたてさせ給ひて、正一位護王大明神と崇めさせ給ひて、種々の物さへ寄せさせたまひたりけるは、辱くめでたき御事の限りならずや。かゝりければ、やこそなき御わたり、つかさぐより、程につけつ、物あまた寄せ給へりこそぞ。
あはれ、高雄の山松、千年を経てしも、かく、一人の縁りをそへ、十かへりの花さく春にあひ給ひぬる御事を、さこそは、天が

沖渡 皇承安三年
醫傳 春まゝ、詔、一様、東公常、白く、欲に、竹高、たつとも、若、はた、じと、云、ヒテ、五、ま、の、ウ、ク、テ、守、る、者、ニ、ナ、ル

神心カヲ再マナ

けりてもよろこびおぼすらめ。いでや、額に箭はたつことも、背にはたてじとたけびけん古語の如く、皇國固有の大御手風も、益良雄らが倭魂も、此の神にはげまされて、いや進みにすすみたりけるが、いかに世の人よ。かく、かたじけなき皇國に生れ出でて、神隨なる誠忠の道に志しを盡さんと思は、高きも賤じきも、この神の御功業の、世にありがたき御ふるまひを、心にあちはひ肝に刻みて、この神徳にならひあやかり奉らんご願ふべき事にこそ。

醍醐天皇時代

第四 配所の月 尾崎 雅 嘉

昌泰三年正月二十五日、道眞公の、右大臣の官職を停めて、太

権師九州及外
事務之取

日本紀月表元年
七月二年二詔停
朱雀院(許)天下
孝子錦

亭子院稽文集
亭子院(宜見平
法)所許(字)

母橋義子(老
相の娘)首(東の
事)を(出)出
一(寺)宮(と)せ
れた(長)年(九
月)其(は)年(四二)

宰権帥に左遷せらるゝよしの宣旨を下されたり。こたび、時平の讒せられし趣意は、はじめ朱雀院の御在位に、當今、敦仁親王と聞えし時、朱雀院御位を、此の親王に譲らんと宣給ひし事ありしに、道眞公申し上げられしは、君には、御年も壯りにおはしませば、御位を譲らせ給ふ事は、いまだ遅からず候はん」と申し上げ給ひし故に、其の事やませ給ひにけり。さて、年を経て、後に再び、今は、位を譲らんと思ふ」と宣給ひければ、このたびは、太子も、既に御生長の御事に候へば、然るべき時節に候はん。さも思し召されんには、急ぎて、其の御沙汰候へかし」と御すゝめ申されたる事ありき。然るに、こたび、讒して申さるゝやう、先に、亭子院のみかご、君へ、御位を譲り給はん

御漢書朝廷之列此(十の卷)十八(所)秩(左)遷

アウ(新)

と宣給ひし時、道眞、おさへてこゝめ奉りしは、君の御弟齊世の親王は、道眞の女の腹に生れたまへるなれば、道眞の心底には、彼の親王を、御位に即け奉り、みづから、一の人として、天の下の權を執らんと謀れるに由れるよし、詞を巧みにして讒せられしなり。
去年十月の頃、文章博士三善清行、ひそかに、道眞公に、書を贈りていはく、算道の事につけて考へ候ふに、明年、必ず、天下に事あるべければ、右大臣の顯職を辭して、御身を全くし給ふべし」と諫められければ、道眞公は、天下に大事のあらんに、我が身のみ災ひを避んさて、職を退くべきにあらずとや思しけん。清行の諫めをも用ひ給はざりしが、果して今年、時平の

又(イ)テ
天皇(様)
ウ(ウ)ウ
右大臣

黨の讒口にかゝり給ひしこそ歎かはしけれ。此の清行朝臣は、人となり明達にして、博く書をよみ、衆藝を兼ね學ばれけるが、道真公の御身に、禍ひの及ばん事を愁へて、かく諫められたるあるべし。

かくて、道真公は、思ひも設けず、左遷の宣旨くだりければ、悲みに堪へずして、亭子院へさゝげられたる御歌、

ながれ行く、われはみくづこなりぬとも、
君しがらみこなりてこめよ。

法皇、此の歌を御覽じて、御涙に咽ばせ給ひ、帝と申せども、我が子なり。行きて申さんに、なごか叶はざらんこおぼしめして、正月晦日、十善の御足に、泥土を踏ませ給ひ、上西門より、豊

殺生偷盜邪語妄語綺語阿比野口貪慾瞋恚邪見

公達
三公子
三公子
七公子

樂院眞言院を打ち過ぎ、清涼殿に近づかせ給ひて、かくと申せ、仰せられければ、菅根朝臣、藏人頭にてありけるが、昔殿上の庚申の夜の御遊に、つらさをうたれまゐらせたる恨みふかくて、此の旨を奏し申さざりければ、法皇は、世の中、あぢきなく恨めしく思し召して、大庭のむくの木のもとに立ちやすらひ給ひて、夕日の、山の端に傾くころ、空しく、還御なさせ給ひたり。

道眞公は、勅宣重くして、男女の御子二十三人おはせし中に、男子四人は、同じく、四方へ流され給ひ、おこなしくおはしましける。姫君は、都の内にてこめられて、いさげなき君達二人は、具しまゐらせて出でさせ給へり。紅梅殿にて愛でせさせ

天神傳記
西洞
紅梅殿
此は右人
梅

給ひし梅を御覽じて、こゝろなき木々にも契りおきてぞ出
でたまふ。

こち吹かば、匂ひおこせよ、梅のはな。

あるじなしとて、春なわすれそ。

さくら花、ぬしを忘れぬ、ものならば、

吹き來ん風に、こごつてはせよ。

此の歌のゆるゑに、此の梅は、筑紫へこびてまゐりたりと傳へ
たり。かくて、二月朔日、都を出て立ち給へるに、次第に、道の程
の遠くなりゆけば、いよく、御心ほそく思し召して、北の方
へおくらせ給ふ、

君がすむ、やごの梢を、ゆくくくこ。

かくるゝまでに、返り見しはや。

ほごもなく、播磨の明石の浦に著きてごまらせ給へるに、宿
のあるじの、いごご痛はしくおもひ奉れるけしきを見たま
ひて、

驛長莫驚時變改。一榮一落是春秋。

こいふ詩を作りて與へたまへり。さて、筑紫に到りつかせ給

ひて、懐ひを述べさせ給へる詩に、

離家三四月、落涙百千行。

萬事皆如夢、時々仰彼蒼。

西府は、人多けれご、はかしく、物をものたまひあはすべ
き人もなければ、異國に行きたまへる御心地にて、常に、一室

推古記 條
十七年四月、あて見元
天平四年五月、筑紫
今十五年、筑紫
今十七年、六月、復又、筑紫
字、

大宰府

のうちへのみ、鬱々として、日を送り給へり。ある夕暮によま
せ給ふ、夕暮

夕されば、野にも山にも、たつけぶり、夕暮

長木、嘆 なげきよりこそ、もえはじめけれ。

又、雨のふりけるに、うちなかめさせ給ひて、

天のゑた、かわける程の、なければや、天

きてしぬれ衣、ひるよしのなき。

こゝに、都府樓といふが身果、罪ありき、これは、天智天皇の御時、天智天皇御時は
めて建てさせ給へる樓にて、官舎の地なり。又、観音寺といふ
寺あり。これも、同じ帝の御時、開基ありし所なり。されど、道眞
公は、不出門行といふ詩を作りて、いつかたへも立ち出でた

観音寺の西の山にあり
たり大空寺の址とし
て、今も猶大空寺といふ
なり

天智天皇御時
春明天皇御時
鳥ノニエテニル

まはず、

都府樓纒看五色。 観音寺只聽鐘聲。

こ作らせたまへり。此の一聯は、白樂天が、遺愛寺鐘欵枕聽。香
爐峯雪捲簾看。こ作りしにもまさりぬへしと、昔の博士ごも
は稱しあへり。菅公、都にましまし、時の御作の詩文を、
菅家文章と名づけて、十二卷あり。又、昌泰三年八月より後、筑
紫にて作らせ給へる詩文を、後草と名づけられて、一卷あり
けるを、延喜三年正月の頃、御心地、例ならざりける時、此の後
草を、箱の中にをさめて、中納言長谷雄卿の許へ遣し給ひけ
るが、其の年二月廿五日、御齡ひ五十九にて、終らせ給へり。

第五 承久の戦ひ

かやうの紛れにて、承久も、三年になりぬ。卯月二十日、帝おりさせ給ふ。東宮、四つにならせ給ふに、譲り申させ給ふ。近比、皆この御齡にて、受禪ありつれば、これも、めでたき御行く末ならんかし。同じき廿三日、院號のさだめありて、今おりさせ給へるを、新院さきこゆれば、御兄の院をば、中院と申し、父帝をば、本院とぞ聞えさする。此の程は、家實の大臣、關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家の大臣、攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても、院の思し構ふる事、老のぶとすれど、やうく漏れ聞えて、東さまにも、その心つかひすべかめり。あづまの代官に

鎌倉ノ主権正
折

天多孫が十五氣
攝政

鎌倉の事
下

北條

か

報

て、伊賀判官光季といふ者あり。かつく、彼れを、御かうじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものごも、おしよせたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづ、いごめでたしとぞ、院は思しめしける。あづまにも、いみじうあわてさわぐ。さるべくば、身のうすべき時にこそあなれと、思ふものから、討手の攻めきたりなむ時に、はかなきさまにて、屍を晒さじ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつは、我が身の宿世をも見るばかりと、思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて、都にのぼす。泰時を、前にするていふやう、已れを、此のたび、都に參らする事は、思ふ所多し。本意の如く、清き死にをす

前
原田

動

へし。人にうしろ見えなむには、親の顔、また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども、義時、君の御ために、後めたき心やはある。されば、横さまの死にをせむ事はあるべからず。心を、たけく思へ。已れ、うち勝つものならば、ふたゝび、此の足柄箱根山は越ゆべし。なご、泣くく、いひきかす。まことに然なり。また、親の顔をがまむ事も、いこあやふしと思ひて、泰時も、鎧の袖をまぼる。かたみに、今や限りこ、あはれに、こゝろぼそげなり。
かくて、うち出でぬる又の日、思ひがけぬ程に、泰時、只一人、鞭を上げて馳せ來ぬ。父、むねうち騒ぎて、いかにこ問ふに、軍のあるべきやう、大方の掟なごをば、仰せの如く、其の心を得侍

天の御事
風雪の
しるし

りぬ。若し、道のほごりにも、圖らざるに、辱く、鳳輦を先だて、御旗をあげられ、臨幸のげんぢうなる事も侍らむに、参りあへらば、その時の進退、いかゝ侍るべからむ。この一事をたづね申さむとて、一人馳せ侍りきこいふ。義時、ごばかり、うち案じて、かしこくも問へるをのこかな。その事なり。正に、君の御輿に向ひて、弓を引く事は、いかゝあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、偏に、かしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は、都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命をすて、千人が、一人になるまでも戦ふべし。こいひもはてぬに、いそぎたちにけり。
都にも、思しまうけつる事なれば、ものゝふごも召し集へ、宇

孫の鐘金丸は治勢田の橋も引かせて敵を防ぐべき用意心こそなり。公經の大將一人のみなむ御孫の事もさるることにて北の方一條中納言能保といふ人のむすめなりその母北の方は故大將のはらからなれば一方ならずあづまを重くおぼしてさしいらへもせず院の御心のかろき事とあふながり給ふ七條院の御ゆかりの殿ばら坊門大納言忠信尾張中將清經中御門大納言宗家又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂などつきくあまた聞ゆれどさのみはしるしがたし軍にまじりたつ人々この外の上達部にも殿上人にもあまたありき。

治勢田の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意心こそなり。公經の大將一人のみなむ御孫の事もさるることにて、北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり、その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心のかろき事とあふながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの、甲斐宰相中將範茂など、つきく、あまた聞ゆれど、さのみはしるしがたし、軍にまじりたつ人々、この外の上達部にも、殿上人にも、あまたありき。

し給はねど世のいご心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に、まじらび給はざめり。新院は、同じ御心にて、よろづ軍の事なごも、おきて仰せられけり。いつの年よりも、さみだれ、晴れ間なくて、富士川、天龍など、えもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も、うちわたしがたければ、攻めのぼる武者ごも、あやしく惱めり。かゝれごも、遂に、都近づくよしきこゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢、六萬餘騎とかや。宇治勢多へわかちつかはす。世の中、ひゞきの、しるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは、深き山へ逃げこもり、遠き世界におちくだり、すべて、安げなく騒ぎみちたり。いかゝあらむご、君も、御心亂れておぼしまごふ。かねては、猛く見えし人々

も、誠のきはになりぬれば、いご、心あわたゞしく、色を失ひたるさまごも、たのもしげなし。みな月廿日あまりにや。いくばくの戦ひだになくて、遂に、みかたの軍破れぬ。荒磯に、高潮なごの、さしくるやうにて、泰時ご時房ご、亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上しも、唯、ものにぞあたり惑ふ。(増鏡)

第六 新嶋守

あづまより、いひおこするまゝに、かの二人の大將軍、はからひおきてつゝ、保元のためしにや。院のうへ、都の外にうつし奉るべしご聞ゆれば、女院、宮々、所々におぼしまごふ事さらなり。本院は、隱岐の國におはしますべければ、まづ、鳥羽殿へ、

保元は... 院のうへ...

網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をか

ぎりの御ありき、あさましうあはれなり。ものにもがなやご思さるゝもかひなし。その日、やがて、御ぐしおろす。御年、四十に、一つ二つや餘らせたまふらむ。まだ、いご、をしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿うつしかゝせらる。七條院へ奉らせ給はむごなり。かくて、同じ十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる浪路を、しのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ごもおぼされず。いかなりける、世々の報いにかご恨めしく、新院も、佐渡の國に遷らせ給ふ。まごこや、七月九日、帝をもおろし奉りき。この四月かごよ。御讓位ごて、めでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて、おり

屋根か... 源氏物語... 網代車...

現世... 鳥羽殿...

去年、松平公命を以て
二、五年、松平公命を以て
三、六年、松平公命を以て
四、七年、松平公命を以て
五、八年、松平公命を以て
六、九年、松平公命を以て
七、十年、松平公命を以て
八、十一年、松平公命を以て
九、十二年、松平公命を以て
十、十三年、松平公命を以て

給へるためしも、これや始めなるらむ。唐土にぞ、四十五日ご
かや、位におはする例ありける。ごぞ、からのふみ読みし人の、
いひし心ちする。それも、かやうの亂れやありけむ。さて、上達
部殿上人、それより下、はた残りなく、この事にふれにし類ひ
は、重く軽く、罪にあたるさま、いみじげなり。中院は、はじめよ
り、しろしめさぬ事なれば、あづまにも、咎め申さねど、父の院、
遙かに遷らせ給ひぬるに、のごかにて、都にあらん事、いご、恐
れありご思されて、御心もて、その年、閏十月十日、土佐の國の
畑といふ所に、渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや。若宮い
できたまへり。承明門院の御せうごに、通宗の宰相中將ごて、
若くて、うせ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがて、彼の宰

時、ラナル、相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、
相、ご、

相の弟に、通方といふ人の家に、ごめ奉り給ひて、近く候ひ
ける北面の下藤一人、召次などばかりぞ、御供仕うまつりけ
る。いご、あやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら、雪、かきく
らし、風吹きあれ、ふさきして、來しかた、行くさきも見えず、い
ご堪へ難きに、御袖も、いたく氷りて、わりなき事多かるに、
憂き世には、かゝれごてこそ、生れけめ。
ごごわり、あらぬ、我がなみだかな。
せめて、近き程にご、あづまより奏したりければ、後には、阿波
の國にうつらせ給ひにき。
さて、此のたび、世のありさま、げに、いご、うたて、くち惜しき
わざなり。あるは、父の王をうしなふためしだに、一萬八千人

即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、
即ち、前、ご、

伊勢大神社前
河津

口笑(新所)
増利(新所)

までありけり。こそ、佛も説き給ひたためれ。まして、世下りて
後、唐土にも、日の本にも、國を争ひて、戦ひをなすと、數へ盡す
べからず。それも、皆、一ふし、二ふしのよせはありけむ。もしは、
すぢ異なる大臣、さらでも、おほやけともなるべき、さみの、
少しのたがひめに、世にへだたりて、その恨みのするなごよ
り、事起るなりけり。今のやうに、むげの民と争ひて、君の亡び
給へるためし、この國には、いさ、あまたも聞えざめり。されば、
承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも、みな、猛かりけ
れど、宣旨には、勝たざりき。保元に、崇徳院の世をみだり給ひ
しに、故院の御位にて、うち勝ち給ひしかば、天照らす御神
も、みもすそ川の、同じ流れと申しながら、猶、時の國主をまも

前幸(河東カモル)

他、カモル、カモル、カモル
カモル、カモル、カモル
カモル、カモル、カモル
カモル、カモル、カモル

り給はすること、は、強きなめり。こそ、ふるき人々も聞えし。又、
信頼の右衛門督、おほけなく、二條院をおびやかして奉りしも、
つひに、空しきかばねをぞ、道のほごりに棄てられける。
か、れば、ふりにし事を思ふにも、なほ、さりとも、いかでか、上
皇今上、あまたおはします王城の、いたづらに亡ぶるやうは
あらむと、たのもしくこそおぼえしに、かく、いさあやなきわ
ざの出で來ぬるは、此の世ひとつ、の事にもあらざらめども、
迷ひの愚かなる前には、猶、いさあやしかし。四つにて、位に即
きたまひて、十五年おはしましき。おりたまひて、後、土佐院
十二年、佐渡院十一年、猶、天の下には、同じ事なりしかば、すべ
て、三十八年がほご、この國のあるじとして、萬機のまつり事

を、御心一つに治め、百のつかさを従へ給へりし、その程、吹く
風の草木をなびかすよりも、勝れる御有り様にて、遠きを憐
び、近きを撫で給ふ御めぐみ、雨のあしよりも、あげれば、津
の國のこやのひまなき政をきこしめすにも、難波の葦のみ
だれざらむ事をおぼしき。はこやの山の峯の松も、やうく、
枝を連ねて、千代に八千代をかさね、霞みの洞の御すまひ、幾
春を経ても、空ゆく月日のかぎりゑらず、のごけくおはしま
しぬへかりける世を、ありく、て、よしなき一ふしに、今は、か
く、花の都をさへ立ち別れ、己がちりぢりにさすらへ、磯の筈
屋に、軒を並べて、おのづから、ここ訪ふものごては、浦につり
するあま小舟、鹽焼くけぶりの靡く方をも、我が故郷のゑる

五かき
スミカチ
こやのひまなき
御假(ナキ)
はこやの山
天宮の御堂
三春のわたはれ
人とたつし
とつ

へかごばかりながめすごさせ給ふ御すまひごもは、それま
で、月日を限りたらむだに、あす知らぬ世のうしろめたさ
に、いご、心ほそかるへし。まいて、いつを果てごか、廻り逢ふへ
き限りだになく、雲の浪、けぶりの浪の、幾重ごも知らぬさか
ひに、世を盡し給ふべき御さまごも、くちをしごいふもおろ
かなり。

此のおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海づらより
は、少しひき入りて、山かけにかたそへて、大きやかなる巖の
そばだてるをたよりにて、松の柱に、葦ふける廊など、けしき
ばかり、こそそぎたり。誠に、柴の庵のたゞ、あはしご、かりそめ
に見えたる御やごりなれど、さる方に、なまめかしく、ゆるづ

カタシサシニ作り
いづこに
あまの
柴の庵
なまめかしく

葦敷の廊
あまの
なまめかしく

尾流のまはりの

白雲天宮句
支人三郎三流
東天の御行
三枚中、移月色
二千里の故人心

白く鷹元り
移り

(十の巻) 四十

きてまなさせ給へり。水無瀬殿おぼしいづるも、夢のやうになむ。はるく、ご見やらる、海の眺望、二千里の外も、残りなき心ちする、今更めきたり。潮風の、いごこちたく吹きくるを聞しめして、

我れこそは、新島守よ。おきの海の、

あらきなみ風、こゝろしてふけ。

同じ世に、又すみのえの、月や見む。

けふこそよそに、沖のまもり。

年も歸りぬ。所々、浦々、あはれなることをのみおぼし歎く。佐渡院、あけくれ、御行ひをのみし給ひつゝ、猶、さりともごおぼさる。隠岐には、浦よりをちの、はるく、ご霞みわたれる空を

ながめ入りて、過ぎにし方、かきつくしおもほしいづるに、ゆくへなき御涙のみぞごまらぬ。

羨まし、長き日かげの、春にあひて、

しほ汲むあまも、袖やほすらむ。

夏になりて、かやぶきの軒ばに、五月雨のしづく、いご、所せきも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりて、めづらしくおぼさる。

あやめふく、茅が軒端に、風過ぎて、

しごろにおつる、むら雨のつゆ。

はつ秋風のたちて、世の中、いご、物がなしく、露けさまさるに、いはむかたなく、おぼしみだる。

故郷を、別れ路におふる、葛の葉の、

あきはくれども、歸る世もなし。

たごしへなく、ながめしをれさせ給へる夕ぐれに、沖のかたに、いごちひさき木の葉の、うかへるご見えて漕ぎくるを、蟹の釣り舟かご御覽ずる程に、都よりの御せうそこなりけり。墨み染の御衣も、夜の御ふすまなど、都の夜寒に、思ひやりきこえさせ給ひて、七條院より參れる御ふみ、ひきあけさせ給ふより、いご、いみじく、御むねも、せきあぐる心ちすれば、やゝ、ためらひて見給ふに、あさましくも、かくて、月日へにける事、けふあすごもしらぬ命のうちに、今一度、いかで見たてまつりてしがな。かくながらは、死出の山路もこえやるへうも侍

らでなむなご、いごおほくみだれかき給へるを、御かほにおしあてゝ、

たらちねの、消えやらで待つ、露の身を、

風よりさきに、いかでこはまし。

八百よろづ、神もあはれめ、たらちねの、

われ待ち見むご、たえぬ玉の緒。

初雁のつばさにつけつゝ、こゝかしこより、あはれなる御消息のみ、常はたてまつるを、御覽ずるにつけても、あさましう、いみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は、新古今の撰者にも召し加へられ、大かた、歌の道につけて、むつまじくめしつかひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆる事かぎりなし。かの、伊勢

秋の夕べ、暮れ雁、

世に待つ、

後鳥羽院
院の歌道ヲ
ニテテテ
カラテテ
又テテ
ソリテテ

より、須磨にまゐりけむも、かくやこたばゆるまで、卷きかさ
ねて、かきつらねまゐらせたり。和歌所の昔のおもかけ、かず
かず、にわすれがたうなご申して、つらき命のけふまで侍る
こと、うらめしきよしなど、えもいはず、あはれおほくて、

寝覺して、きかぬをきゝて、わびしきは、
あらし磯なみの、あかつきのこゑ。

こあるを、法皇も、いみじごおぼして、御袖、いたくしぼらせた
まふ。

浪間なき、沖の小島の、はまびさし、

久しくなりぬ。みやこへだて。

木枯しの、おきの、柚山、ふきしをり、

十月頃、吹
風

あらくしをれて、もの思ふころ。
をりくよませ給へる御歌ごもを書きあつめて、修明門院
へ奉らせ給ふ。その中に、

水無瀬山、わが古里は、あれぬらむ。

まがきはのらご、人もかよはで。

かざしをる、人もあらばや、言ごはむ。

おきのみやまに、杉は見ゆれど。

限りあれば、さてもたへける、身のうさよ。

たみのわらやに、のきをならべて。

(増鏡)

後鳥羽院、別荘

杉、枝、フオリ、テ、歌
カシムリ、ニ、サ、ス、ク
山、の、又、ハ、三、輪、
山、の、杉、ヲ、サ、ス、ク

家系記
至徳行日記

多那...
...
...

...
...

...
...

代三

...
...

...

第七 いさよふ月

阿 佛 尼

昔、壁の中より求めいでたりけん書の名をば、今の世の人の
子は、夢ばかりも、身の上の事は知らざりけりな。水莖の岡
の葛葉、かへすくも、書きおく跡、たしかなれども、かひなき
ものは親のいさめなり。又、賢王の人をすて給はぬ政にも洩
れ、忠臣の世を思ふ情けにもすてらるゝものは、數ならぬ身
一つなりけりと思ひ知りながら、又、さてもあらで、猶、この
うれへこそ、やる方なく悲しけれ。
更に、思ひつゝくれば、やまご歌の道は、唯、まごこそすくなく、あ
たなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。日の本の國に、天
の石戸ひらけし時、四方の神等の、神樂の詞を始めて、世を治

め、物を和ぐる媒となりけるこそ、この道のひじり等は、記
し置かれたりける。さても、また、集を撰ぶ人は、ためし多かれ
ご、二たび、勅をうけて、世々に聞えあげたるは、類ひ、猶、ありが
たくやありけん。そのあごにしもたづさはりて、三人のをの
こ子ども、百ちゝの歌の古反故ごもを、いかなる縁にかあり
けん。預りもたるこそあれご、道を助けよ。子をはぐゝめ。後の
世をこへごて、深き契りをむすびおかれし細川の流れも、故
なく、せきごめられしかば、跡ごふ法の燈火も、道を守り、家を
助けん親子の命も、諸共に、きえを争ふ年月を経て、危く、心ほ
そきものから、何ごして、つれなく、今日まではながらふらん。
惜しからぬ身ごつは、やすく思ひすつれごも、子を思ふ心

子三ヨフテ限ミカガ
モ死スんツガヨカ
道兼一判書

龜の中ニ火ヲ焚シ
井ノ邊ニツツキテ
カガヒサシクハ
ウノコ
三河官
千代は
カガヒサシクハ
ウノコ
三河官
千代は

の闇は、猶しのびがたく、道をかへりみる恨みはやらん方な
く、さてもなほ、あづまの龜の鑑にうつさば、曇らぬ影もや顯
はるゝとせめて思ひあまりて、萬のはかりを忘れ、身をえ
うなきものになしはて、ゆくりもなく、いさよふ月に、さそ
はれ出でなんぞ思ひなりぬる。さりさて、文屋康秀がさそ
ふにもあらず。住むべき國もさむるにもあらず。ころは、み冬
立つはじめの定めなき空なれば、ふりみふらずみ、時雨も絶
えず、嵐に競ふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れ
て、心細く悲しけれど、人やりならぬ道をれば、行き憂しとて
も、さよまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。
めかれせざりつるほどだに、荒れまさりつる庭も籬も、まし

三河官
千代は
カガヒサシクハ
ウノコ
三河官
千代は

夫ハ
心配
左の
枕

てご見まはされて、慕はしげなる人々の袖も慰めかねたる
中にも、侍従大夫あごの、あながちちうちくつしたるさま、い
ご心ぐるしければ、さまざま、いひこしらへ、闇のうちを見れ
ば、昔の枕さへ、さながらかはらぬを見るにも、今更かなしく
て、傍らにかきつく。

ごめおく、ふるき枕の塵をだに、

わが立ちさらば、たれか拂はん。

代々に、かきおかれける歌の草紙ごもの奥書して、あたなら
ぬかぎりを書りしたゝめて、侍従のかたへ送るさて、書きそ
へたるうた、

和歌の浦に、かきこめたる、藻鹽草、

藻鹽草
和歌の浦に

ミ、代々草紙
草紙
草紙
草紙

これをむかしの、かたみごも見よ。

あなかしこよ。よこ浪かくな。はま千鳥。

ひごかたならぬ、あごをおもはど。

これを見て、侍従のかへりごこ、いと疾くあり。

つひによも、あたにはならじ。藻鹽草。

かたみをみよの、跡にのこせば。

迷はまし。をしへざりせば、はま千鳥。

ひごかたならぬ、あごをそれごも。

このかへりごこ、いとおこなしければ、心やすく、哀れなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又、うち志ほたれぬ。大夫の、傍ら去らず馴れ來つるを、振りすてられなん名殘、あながちに

あなかしこよ
よこ浪かくな
はま千鳥
ひごかたならぬ
あごをおもはど
これを見て
侍従のかへりごこ
いと疾くあり
つひによも
あたにはならじ
藻鹽草
かたみをみよの
跡にのこせば
迷はまし
をしへざりせば
はま千鳥
ひごかたならぬ
あごをそれごも

思ひありて
手習ひしたる
を見れば

思ひありて、手習ひしたるを見れば、

はるくご、ゆくさき遠く、慕はれて、

いかにそなたの、そらをながめん。

ご書きつけたる、ものより、殊にあはれにて、同じ紙に書きそ

へつ。

つくくご、空な眺めそ。こひしくば、

道ごほくごも、はやかへりこん。

ごぞ慰むる。

山より、侍徒の兄の律師も、いでたち見んごておはしたり。それ、いと心ぼそしご思ひたるを、この手ならひごもを見て、又、書きそへたり。

以
源
危
子
ち
り

あたにのみ、涙はかけじ、旅ごろも、
 心こころのゆきて、たちかへるほど。
 こは、こといみしながら、涙のこぼるゝを、荒らかに、物言ひ紛
 はすも、さまざま、あはれなるを、阿闍梨の君は、山伏にて、この
 人々よりは兄なり。この度の道のゑるべに送り奉らんさて、
 出でたゝるめるを、この手習ひに、又、まじらはざらんやはこ
 て、書きつく。

立ちそうぞ、うれしかりける。旅衣、

かたみにたのむ、おやのまもりは。

女子は、あまたもなし。唯、ひごりにて、この近きほどの女院に
 侍ひ給ふ。院の姫宮一所生れ給ふばかりにて、心づかひもま

新陽明院 紀の待

けりすういん
 あり
 度々(山)
 ナフカフカ
 ナフカフカ

挿入文

こごしきさまにて、おこなしくおはすれば、宮の御方の戀ひ
 しさも、かねて申し置くついでに、侍従大夫なごのこご、はぐ
 くみおほすべきよしも、こまかに書きつけて、奥に、

君をこそ、朝日さたのめ、ふるさこに、

残るなでしこ、霜にからすな。

さきこえたれば、御かへりも、こまやかに、いごあはれに書き
 て、歌のかへしには、

思ひおく、こゝろさゝめば、故郷の、

おもにも枯れじ。やまごなでしこ。

さぞある。五つの子どもの歌、のこりなく書きつゝけぬるも、
 かつは、いごをこがましけれど、親の心には、哀れにおぼゆる

美
 フカ
 フカ

まゝに書きあつめたり。さのみ心よわくてはいかゝてつ
れなく振りすてつ。
粟田口といふ所より、車はかへしつ。ほどなく、逢坂の關越ゆ
るほどに、

定めなき、命は知らぬ、たびなれど、

またあふ坂さ、たのめてぞゆく。

野路といふ所は、こしかた、ゆくさき、人も見えず、日は暮れか
かりて、いご物がなしと思ふに、時雨さへうちそゞぐ。

うちあぐれ、ふる郷思ふ、袖ぬれて、

行くさき遠き、野路のしのはら。

今宵は、鏡といふ所に著くべしとさだめつれど、暮れはて、

行きつかず、もり山といふ所にさゞまりぬ。こゝにも、時雨、な
ほ慕ひ來にけり。

いごなほ、袖ぬらせとや、宿りけん。

間なくしぐれの、もる山にしも。

今日は、十六日の夜ありけり。いご苦しくて臥しぬ。

(十六夜日記)

第八 鉢の木

行くへ定めぬ道なれば、來し方はいづくならまし。
是れは、一所不住の沙門にて候ふ。我れ此のほどは、信濃の國
に候ひしが、餘りに雪深くなり候ふ程に、まづ此の度は、鎌倉

に上り、春になり修行に出でばやと思ひ候ふ。
 信濃なる淺間の嶽に立つ烟り、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の
 おほる山、捨つる身になき友の里、今ぞうき世を離れ坂墨の
 衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに著きにけり。
 急ぎ候ふ程に、上野の國佐野のわたりに著きて候ふ。あら笑
 止や。又雪のふり來たつて候ふ。此所に宿を借らばやと思ひ
 候ふ。いかに、此の家の内へ案内申し候ふ。
 誰れにてわたり候ふぞ。
 これは修業者にて候ふ。一夜の宿を御貸し候へ。
 易き御事にて候へども、あるじの御留守にて候ふ程に、御宿
 はかなひ候ふまじ。

信濃なる淺間の嶽に立つ烟り、遠近人の袖寒く、吹くや嵐のおほる山、捨つる身になき友の里、今ぞうき世を離れ坂墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに著きにけり。

陸奥の奥御

さらば御歸りまで、是れに待ち申さうずるにて候ふ。
 それはごもかくもにて候ふ。わらはは外面へ出で向ひ、此の
 由を申さばやと思ひ候ふ。
 嗚呼ふつたる雪かな。いかに世にある人の、面白う候ふらむ。
 夫れ、雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は鶴鬣を著て立つて
 徘徊す。ご云へり、されば今降る雪も、もご見し雪に變らねご
 も、我れは鶴鬣をきて立つて徘徊すべき、袂もくちて袖狭き、
 細布ごろも陸奥の、けふの寒さをいかにせん。あら面白から
 ずの雪の日やな。あら思ひよらずや。此の大雪に、何さて是れ
 に佇みて御入り候ふぞ。
 さん候ふ。修業者の御入り候ふが、一夜の御宿ご仰せ候ふ程

に、御留守の由申して候へば、御歸りまで御待ちあらうずる由仰せ候ふ程に、是れまで参りて候ふ。

^主扱其の修行者はいづくにわたり候ふぞ。

^妻あれに御入り候ふ。

^僧我れらが事にて候ふ。いまだ日は高く候へども、餘りの大雪

にて、前後を忘れて候ふ程に、一夜の宿を御貸し候へ。

^主易き御事にて候へども、餘りに見苦しく候ふ程に、御宿はか

なひ候ふまじ。

^僧いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候ふ。平に一夜を御

貸し候へ。

^主ごめ申したくは候へども、我れ等夫婦さへ、住みかねたるて

いにて候ふ程に、中々御宿は思ひもよらぬ事にて候ふ。是れより十八町あなたに、山本の里にて良きごまりの候ふ。日も暮れぬ先に、一足も早く御出で候へ。

^僧扱はしかご御貸しあるまじにて候ふか。

^主御痛はしくは存じ候へども、御宿は参らせ難う候ふ。

^僧あら曲もあやよしなき人を待ち申して候ふものかな。

^妻あさましや我れ等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめては、箇様の人に値遇申してこそ、後の世の便りも

なるべけれ。然るべくば、御宿を参らせ給ひ候へ。

^主さやうに思しめさば、何さて、以前には承り候はぬぞ。いや此

の大雪に、遠くは御出で候ふまじ。某追つ付き留め申し候ふ

佛法ニシテ戒ノコト
コト規別ノコト

べししのううく旅人御宿参らせううのう。餘りの大雪に申すこ
 とも聞えぬげに候ふ。痛はしの御有り様やな。もご降る雪に
 道を忘れ、今降る雪に行き方を失ひ、一所に佇みて、袖なる雪
 を、うち拂ひうち拂ひし給ふ景色、古歌の心に似たるぞや。駒
 こめて袖うち拂ふ陰もなし。佐野のわたりの雪のゆふ暮ま、か
 やうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり、是れ
 は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひ疲れ給はんより、見
 苦しく候へど、一夜はごまり給へや。

備げに是れも旅の宿、かりそめながら、値遇の縁、一樹の陰のや
 どりも、此の世ならぬ契りなり。それは雨の木かげ、是れは雪
 の軒ふりて、うき寝ながらの草枕、夢より霜やむすぶらん。

迷ふ世なり、あはれ
 候ふ宿、うき寝ながら
 草枕、夢より霜やむすぶらん

七、降る雪に陰
 七、草枕、夢より霜やむすぶらん

主いかに申し候ふ。御宿は申して候へども、何にても候へ、参ら
 せうせうずる物もなく候ふはいかに。
妻折節これに粟の飯の候ふ程に、苦しからずばまゐらせられ
 候へ。
主さらば其の由申し候ふへし。いかに申し候ふ。御宿をば参ら
 せて候へども、何にても参らせうせうずる物もなく候ふ。折節こ
 れに粟の飯のあるよし申し候ふ。苦しからずばきこしきこし召さ
 れ候へ。
備それこそ日本一のことにて候ふ。賜り候へ。
主のうきこし召されうせうずると仰せ候ふ。急いで参らせられ候
 へ。

「妻」心得申し候ふ。

「主」總じて此の粟を申す物は、いにしへ世にありし時は、歌によみ詩に作りたるをこそ承りて候ふに、今は此の粟を以て身命を継ぎ候ふ。げにや盧生が見し、榮花の夢は五十年、其の邯鄲のかり枕、一睡の夢のさめしも、粟飯かしく程ぞかし、哀れや、げに、我れもうちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽ぜよ。かほごまで「住みうかれたる故郷の、松風さむき夜もすがら、寝られねば夢も見ず。なに思ひ出のあるべき、夜の更くるに付いて、次第に寒くなり候ふ。何をかな火に焚いてあて参らせ候ふべき。やおもひ出したる事の候ふ。鉢の木を持ちて候ふ。これを切り、火に焚いてあて申

表一邯鄲
夢
五十年
粟飯
かしく
程ぞかし
哀れ
や、げに
我れもうちも
寝て
夢にも
昔を見るならば
慰む事もある
べきに
なう御覽ぜよ
かほごまで
住みうかれたる
故郷の
松風さむき
夜もすがら
寝られねば
夢も見ず
なに思ひ出
のあるべき
夜の更くる
に付いて
次第に寒く
なり候ふ
何を
かな火に
焚いてあて
参らせ候ふ
べき
やおもひ
出したる
事の候ふ
鉢の木を
持ちて候ふ
これを切り
火に焚いて
あて申

し候ふべし。

「備」げに、鉢の木の候ふよ。

「主」さん候ふ。某世にありし時は、鉢の木に好き、あまた木を集め持ちて候ひしを、筒様の體にまかり成り、いやく、木好も無用と存じ、みな人にまゐらせて候ふ。さりながら、今も梅、櫻、松を持ちて候ふ。あの雪もちたる木にて候ふ。某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、之れを火に焚き、あて申さうずるにて候ふ。
「備」いやく、是れは思ひも寄らぬ事にて候ふ。御志しはありがたう候へども、自然又、お事世に出で給はん時の、御慰みにて候ふ間、中々思ひもよらず候ふ。

梅の木の花咲く世に逢はむ事今此の身にては逢ひがたし。

「主」いや、ごても此の身は埋れ木の、花咲く世に逢はむ事、今此の身にては逢ひがたし。

「妻」唯いたづらある鉢の木を、御身の爲に焚くならば。

「主」これぞ誠に難行の、のりの薪と思し召せ。

「妻」しかも此の程雪降りて。

「主」仙人に仕へし雪山の薪。

「妻」かくこそあらめ。

「主」われも身を捨て人の爲の鉢の木、切るごても、よしや惜しからじと、雪うち拂ひて、見れば面白やかにせむ。まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべき。見じといふ、人こそうけ

世凍東頭ん
度解成松也
魚を煮あす

冬は木が葉を
おろし
梅の木は
冬に咲く

梅の木の花咲く世に逢はむ事今此の身にては逢ひがたし。

鉢木ノ

梅の木は冬に咲く

梅の木は冬に咲く

梅の木は冬に咲く

梅の木は冬に咲く

梅の木は冬に咲く

梅の木は冬に咲く

梅の木の花咲く世に逢はむ事今此の身にては逢ひがたし。

れ山里の、折りかけ垣の梅をだに、情けなしと惜みしに、今更薪になすべしと、かねて思ひきや。櫻を見れば春ごごに、花すこし遅ければ、此の木やわぶるご、心を盡し育てしに、今は我れのみわびて住む、家櫻きりくべて、ひ櫻になすぞ悲しき。さて松はさしもげに、枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし、其のかひ今はあらし吹く、松はもごより煙りにて、薪なるもごごわりや。切りくべて今ぞみ垣守、衛士の焚く火はお爲なり、よくよりてあたり給へや。

「主」近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候ふ。

「主」御出でにより、我れ等も火にあたりて候ふ。

「主」いかに申し候ふ。あるじの御名字をば何と申し候ふぞ。承り

たく候ふ。
「主」 いや某は名字もなき者にて候ふ。
「備」 何ぞ仰せ候ふとも、唯人とは見え給はず候ふ。自然の時の爲
 にて候ふ。なにの苦しう候ふべき。御名字を承り候ふべし。
「主」 此の上は、何をかつ、み候ふべき。これこそ佐野の源左衛門
「備」 の尉常世がなれる果てにて候ふ。
「主」 それは何さて、かやうの散々の體にはなり給ひて候ふぞ。
「備」 其の事にて候ふ。一族ごもに押領せられて、かやうの身とな
 りて候ふ。
「備」 のうそれは、何さて鎌倉へ御上り候ひて、其の御沙汰は候は
 ぬぞ。

「主」 運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候ふ上は候ふ。
 かやうにおちぶれては候へども、御覧候へ。是れに、武具一領、
 長刀一えだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候ふ。これは
 只今にてもあれ。鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、此の
 具足ごつて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりご
 もあの馬に乗り、一番に馳せ参じ著到につき、さて合戦初ま
 らば、敵大勢ありごとも、一番にわつて入り、思ふ敵ご、よりあ
 ひ撃ち合ひて、死なん此の身の、此の儘ならばいたづらに、飢
 ゑに疲れて死なん命、なんばう無念の事さうぞ。
「備」 よしや身の、かくては果てじ只頼め、我れ世の中に在らむ程、
 又こそ参り候はめ、暇申して出づるなり。

「妻」名残惜しの御事や。始めはつゝむ我が宿の、さも見苦しく候へど、暫しは留り給へや。
 「留」留る名残のまゝ、あらば、扱幾度かゆきの日の、
 「主妻」空さへ寒き此の暮れに、
 「留」いづくに宿をかり衣、
 「二人」今日ばかり留り給へや。
 「留」名残は宿にごまれども、いこま申して、
 「二人」御出でか。
 「留」さらばよ常世。
 「二人」又御入り。
 自然鎌倉に御上りあらばお尋ねあれ。けうがる法師なり。か

臣等所奉る代

ひがひしくは無けれど、公方の縁になり申さむ。御沙汰すてさせ給ふなさいひすて、出で船の、ともに名残や惜むらん。

第九 草枕 那珂通高

嘉永年間、徳川氏へ、將軍宣下の勅使として、京都より下されたりし公卿の中に、

君が代は、うまやうまやに、旅寝して、
 くさのまくらも、知らで來にけり。
 とよまれたる歌ありき。わが國、近時の旅店は、衾幅より、飲食にいたるまで、一も闕くるころなきは、この歌にてあきら

征夷將軍所
前、
二官、
うさ、
レシ、
タ

かならむ。この頃、肥後の竹添井井の棧雲峽日記にて、支那にありし時、北京より蜀に遊びたる紀行の草稿を見しに、その長安に至りし條にいはいはく、凡、禹域客店、獨就臥房、而無他具。故行旅者、必齋枕席衾裯、始得涉遠。北地又無廁竇、人皆矢於豚柵、豚常以矢爲食、瘦削露骨、有上柵者、輒來群於後、驅之不去、殆使人困。此地始有廁竇之設、不潔淨亦勝無矣。と見えたり。支那の旅況、これをわが國の今日に比ぶれば、實に困しといふべきなり。顧ふに、世の、いまだ關ヶざりし時に當りては、いつれの國か然らざらむ。

わが國も、往時は、これに類せしこと多かりき。日本武尊は、皇子なり。その尾張の國に留りたまひし日、劔を桑樹に懸けて、

支那の事
肥後竹添
井井の棧雲峽日記
支那の事
支那の事
支那の事

萬葉集
太磨王

廁に上られしと、史にも見えなれば、上古の廁、必ずしも今日の如きにあらず。降りて、徳川氏の始めに至りても、將軍秀忠、夜、廁にて、刺客の麥隴中より來れるを見きこいへば、その状も知られぬべし。されど、わが國、古より矢を以て、田に糞ふ故に、家として、廁竇の設けなきはなかりき。只、飲食、衾裯の不便に至りては、全く、支那に異ならざりしなり。嘗に支那に異ならざりしのみにあらず、甚だしきに至りては、旅店だにあるとなかりき。これ、往時、旅を草枕と稱せし所以なり。古歌に、
家があれば、筈にもる飯を、くさ枕、
たびにしあれば、椎の葉に盛る。

こよめり。飲食も亦、これに準ず。故に、軍防令には、兵士をして

軍人新訓
草枕

支那の事
肥後竹添
井井の棧雲峽日記
支那の事
支那の事
支那の事

在りし事
周來後
は、事
は、事
は、事

人毎に、糶六斗を儲へしむといひ、伊勢物語には、「涙を、糶の上
に落す」といひ、太平記には、「餼を進む」といへる、皆これ、支那の
「適千里者、三月聚糧」といへるに、その趣き、同じからずや。
柳庵雜筆に、「木曾の贄川驛の一旅店にありし慶長三年の端
書ありし宿帳」といふものを見るに、
御糶、ほごばし過し不申様、念入れ可申候。夜の物、御先觸に
御書入なき分は、咄と御受合不申候。
又令條記に、寛永三年五月、將軍上洛の時、路次中宿賃御定書
といふものを載せて、
四文、馬屋も無之、自分薪燒き候は、二文、馬屋は無之とも、
亭主の薪に候は、四文たるべし。京にては、馬屋無之、外に

人七馬

落元所

繋ぎ、自分の薪二十四文の事。

といへり、夫れ、慶長より、寛永にいたるに、迨びては、世もまた、
やうやく開けて、その旅況も、往時と同じからざるべきを、行
旅は、猶糧を齎し、旅店を餼り、湯を請ひ、糶を食ひて寝るに、
ままり、いはゆる木賃にて、薪の價ひをのみ償ひしに、過ぎざ
りき。若し、旅客、自ら、糶を漬すを煩しく思ひ、これを、旅店に託
すれば、その漬すと、度を過ぎしめて、竊むものありしを以て、
「ほごばし過さず」といふ語を載せたるなり。余、幼時、故老に聞
けることあり。昔は、諸國修行と稱する者、必ず鍋と米とを携
へ、至る所、山野に露宿して、逆旅に就かず。今、劇場にて、宮本武
藏に扮する者、必ず横ざまに、一包を負へり。これ、その飯を炊

糶
不
分
り

見
ま
し
た

六十六部といふもののみさへり。されば我が國も亦、二百年前の旅況、必ずしも支那と異ならざりしならむ。嗚呼、古を尙びて、今を鄙むるは、學者の通患のみ。飯は、椎の葉に盛り、枕は、草を結へるも、なほ尙ぶべしとするか。余は願はず。(洋々社談)

ぎし鍋なり。昌平、日久しくして、僅かに、その遺風を存する者、獨り、世のいはゆる六十六部といふもののみさへり。されば、我が國も、亦、二百年前の旅況、必ずしも、支那と異ならざりしならむ。嗚呼、古を尙びて、今を鄙むるは、學者の通患のみ。飯は、椎の葉に盛り、枕は、草を結へるも、なほ尙ぶべしとするか。余は願はず。(洋々社談)

身の油 僧 辨玉

大路行く、人にやこはれ、
ひきこ引く、力、車の、
七、くるま、數重ぬれど、

あさよひの、煙りのしろに、
ここく、に、數へあつれば、
かなしかる、おいの父母、
いとほしき、吾が妻子らの、
あすの日を、過さんまけも、
かりてひく、車のあたひ、
かりてすむ、家のあたひの、
今日の日の、しろになさんご、
かすゆ酒、すゝりもかねて、
汗あえて、息づきあへぐ、
いたづきを、つらく思へば、

ゆくさくさ、轍をぬぐひ、
軸にさす、油もおのが、
身の油なる。

第十 雪をめぐる記 村田 春海

かきかぞふ四つの時につけて、村肝の心をやるわざなん多
かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ、みつの
ならはしこそ、世に類ひなきすさみごはすめれ。ここさへく
から人のためしにも、敷島の大和の國ふりにも、高きも賤し
きも、隔つることなく、古より、今にかよはして、こを、歌によ
ひ、文にしるしてめであへるは、何れを劣れりとも、何れを優

春夏秋冬

雪をめぐる記

雪をめぐる記
雪をめぐる記
雪をめぐる記

れりとも、品定むべきたくひならぬは、もごより、論ふべきこ
ごならねど、處に隨ひ、人によりて、おのがじし、心の引くかた
なくてやはあらん。梓弓はるのあした、うらく、ごひもごき
そむる花の心をこはんには、まづ、かしこの野づら、此處の山
里、霞をしのぎ、岩ほをたごりて、名ぐはしき陰をもごめてこ
そ、類ひなきにほひをも見るべけれ。おごろなる垣ほのうち、
あやしきふせやの前に、一本、二本を移し植ゑたらんは、なか
くに、花のおもてをぞふせつべき。又、真萩さく秋の盛り、隈
なき月の光りは、所をわかねど、あるは、高殿の簾をか、げて、
千里の空を望み、あるは、行く河の流れに浮びて、水底の影を
もてあそびてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家しみ、に立

ちならび、はた、はかなきはひりの庭に、うづくまり居て見ん
 には、塵あくたのけがしきも、澄み渡る光りに、いよ、あらは
 れ行きて、かへりては、月月光うごかれこそ覺ゆめる。か、れば、月
 と花とは、所見九場所からこそあはれも、うちそはるめれ。さるは、かた
 の翁がたくひの、しづたまき、品賤しくして、うつゆふの、さく
 くるしきすみかに、かきこもり居つゝ、くさづゝみ、病ひにの
 みか、づらふ身は、かの高殿の望み、舟屋形のすさみは、如何
 でか思ひもかけん。又、野山の遊びも、おのづから、時におくれ、
 をりを過して、常に、心にそむくふしなん多かめる。かれ、雪ば
 かりは、此の二つに異なり。葎ワラにこちたる門のうちも、たゞ、一
 夜のうちに、玉しく庭さうつろひ、あばらなる板やが軒も、時

自ら身ヲ財シテ
 アス言ノ葉

月と花と
 見九場所

の間に、白がねをはやせるばかりに、姿をかへもて行きて、あ
 したゆふへのいぶせさも、更に覺えず。又、目馴れたる市のち
 またも、忽ちに、景色をそへて、いひしらぬ山里の思ひをなし、
 往きかふ商人の笠簔までも、見處ありこそ覺え、はかなき本草、
 よろづのものも、さながら珍らかなりこのみ、目ごゝめらる
 りは、たゞ、居ながらにして、境をうつし、所を變ふこやいふべ
 からん。かくてこそ、心に足らはぬこそなく、外に羨むべきふ
 しもあらね。されば、此の雪にのみ、翁が、心をよするも、所に従
 ひ、人によりたる老いのすさみなるはや。

第十一 歌がたり 同

院
天皇
御
出
立
卷

歌のさまの、よしあしをさだむるは、海山のけしきの、人によ
りて、こゝろの引くかたことなるが如し。そは、見る人のこゝ
ろの、高きこひくきことによりてしもぞことなる。萬葉集にの
りたる、藤原奈良の頃の、人々のすぐれたる歌ごもは、富士の
ねの、雲にそびえてたかく、熊野の海の底ひもしらずふかき
か、見るもかしこく、のぞむもあやしきがごことし。古今集のこ
ろなる歌は、須磨明石のゆほびかある海づら、嵐山、小倉の峰
の花もみちの、をりにあひて、目もあやなるがごことし。古今集
よりくだりては、けしきは、やゝおごりぬれど、猶、おのづから
なる海山なり。かくて、題詠の歌もはらごなりてよりは、おの
づからなる、まことの景色はうせて、みな人の心もてつくり

須磨明石
小倉の
おのづからなる
景色をめぐれど、心
おくれたるきは
の人は、かの、たくみに造りなせらむ
中島の
有りさま、やり水の心ばへ、岩木のたゞずまひなごの、世に似
ずをかしきにのみ、目くれて、かへりては、そを、おのづからな
る海山にもまされりこそ思ふなる。そは、おのがじしの心の
引くかたなりとも、いひてやみぬべけれど、萬の道、こゝろ高
きかたをもごむるこそ、まことのすちなれ。さるを、歌のみは、
高きかた求むる人のまねなるは、口惜しきわざならずや。手
かくみち、繪のたくみは、さらにもいはじ。萬のはかなきわざ
すら、物の上手は、其のすちにつけては、いと高きこゝろばへ

なせる庭の如し。かれ、こゝろたかき人は、富士のね、熊野の海、
須磨明石、あらし、小倉の、おのづからなる景色をめぐれど、心
おくれたるきは、の人は、かの、たくみに造りなせらむ、中島の
有りさま、やり水の心ばへ、岩木のたゞずまひなごの、世に似
ずをかしきにのみ、目くれて、かへりては、そを、おのづからな
る海山にもまされりこそ思ふなる。そは、おのがじしの心の
引くかたなりとも、いひてやみぬべけれど、萬の道、こゝろ高
きかたをもごむるこそ、まことのすちなれ。さるを、歌のみは、
高きかた求むる人のまねなるは、口惜しきわざならずや。手
かくみち、繪のたくみは、さらにもいはじ。萬のはかなきわざ
すら、物の上手は、其のすちにつけては、いと高きこゝろばへ

言
又
言
葉

海
波
静

題
詠
の
歌

の
心
も
て
つ
く
り

高
き
か
た
を
も
ご
む
る
こ
そ

手紙の事... 神... 依... 何... 神...

あるものにて、めのまへに、さる類ひのおほかるを、世のうた
びこの、思ひくらへてはぢざるこそ、ころえね。このくだれ
る世にして、いにしへの歌のころの、たかくすぐれたるよ
しを、よく、考へさだめたるは、わが縣居の翁ぞはじめなりけ
る。かの荷田の東萬呂の大人より、いにしへの輩の道は、よく、
その山口をひらきたれど、歌の事は、さだかにあげつらへる
ことなかりき。また、在満ぬしが八論さかいふは、あらたに、
考へられたる事もみゆれど、新古今のころなるを、歌のみさ
かりありといへるは、猶、ふかくも、たごらぬわざになむ。また、
難波の契沖法師は、世に、すぐれたる才ありける人にて、古の
歌を、ごき得る事の、正しきすちは、この人をこそはじめこは

手紙の事... 神... 依... 何... 神...

すめれど、歌よむことのうへまでは、ころおよばずやあり
けむ。今、漫吟集のうたごもをみるに、こまかに、たくみなる歌
はみゆれど、いにしへの、たかく、のごかなるすがたを、まねび
いでたりとおぼゆるふしはみえず。すべて、この法師の歌に
しては、猶、ふさはしからぬやうにぞおぼゆるかし。かにかく
に、いにしへの高き手ぶりをしのばむ人は、わが縣居の翁が
をしへに、よらでやはあらむ。

第十一 うづみ火 清水濱臣

いまし、埋み火に問はん。いましよ、何處の山に生ひ立てる木
ぞ。如何なる山がつに逢ひて、斯くは伐り焼かれ、いかなる契

りありてか、我が手にはならさるゝぞ。いまし、山がつにもあ
はで、心のまゝなる奥山中に生ひ茂らば、天つよはひをたも
ちて、幾百ごせの後にも安かるべきを、あはれ、宿世のはかな
さよ。埋み火答へけらく、まごささぞ侍る。又さもはへらず。己
れ、小野山奥に生ひ立ちて、こゝらの春秋を経ぬるものから、
楯くぬぎの世に棄てられたる木にて、桃栗のめでたき實も
むすばす、櫻海棠のなつかしき花も咲かぬ身なるを、もし、伐
り焼かれて、かゝる姿さならずば、いかで、宮殿の内に召され
て、火ごりの中にごりはやされ、伏せ籠の下にかしづかれて、
侍従奥人なごのえならぬ香にしむごこの侍らん。徒らに、谷
の底、山の陰に朽ち果てはへらんより、ほまれあるごごに侍

らずや。いかで、はかなきおのれごはのたまふぞ。又詰りごは
く、あはれ、あいなな榮えや。はかなの譽れや、いまし、今の姿ご
なりては、灰の中に埋れてあらん程こそ、冬の日ばかりは、
さてもありなめ。火箸もて搔きあらはされなば、一時が間も、
なからふまじきいのちなるを、なにの頼みごころありてか、
榮えごはせん。何のかゝり處ありてか、譽れごはせん。果ては
「火鎮灰復死」といふにいたらじやは。埋み火答ふべきごごな
くて、はな白みて、灰の底に落ちいりぬ。

第十三 臨瀛閣の記 富士谷成章

ひんがし山の春の曙、さがの、秋の夕暮は、えんなる心地し

て、たわやぎたる様こそしたれ、近き程に、難波わたり、志賀の
辛崎なごきこゆれど、都人は、あからさまなる旅ねをだに物
うくして、心易くもなさずかし。まいて、景色ある山の姿、ゆほ
びかなる海の上などは、西の國にこそ多かれと聞くを、心あ
る人こそ、さしなから、遠きをも知るこいふなれ。もろこしも
近くなる夢路も、ひたすらに、見ぬ方には通ふこそなし。ある
は、をかしようよみおけるふるこをも見、おのづから、人のゆ
かしからんと語りなすをき、おきて、詠めがちなる春の菅
の根、夢路に疎き秋の夜頃、ゆくへなくたましひあくがれ、心
かゝらぬ山なきに、今も見てしがと思ふをり、多かり。繪
にかけるは、今少しありさまわかれ、見るかひある心地ぞす

る。かゝるに、安藝の人、淺野なにがしのぬし、住む所におもし
ろき高殿を作り重ねて、りえいかく名づく。そのほごり、見
やらるゝ山のあるやう、海の心ばへ、林のたちご、水の流れま
で、細やかなる繪につくりて、此のありさま、記に作るべき由
いひおこせたるを見るに、しるへあく思ひやられつるより
は、こよなう目移りて、かつく、其の境ひに遊ぶらん心地ぞ
する。閣は、南に向ひて、ゆたかなる海原の様、ふりさけ見る便
りあらんかし。僧老の山は、唐めき、奇しき名したれど、形ちを
かしようて立てり。巽にあたりて、沖中に、いつく島、おもしろく
疊みなせり。あたならん人には見せじこいひけん、さるここ
こそ見ゆる。沖にうきくると問ひつるわれかたまなる島は、

誰れ語りあかしけん。何の浦くれの隈など、尙多く見ゆれど
あらぬこそを、さのみはごてなん。閣は、三かさねに作りあげ
て、ごぶ雁の數さへ、うつぶしてよみつべう見ゆ。庭ゆたかな、
らんど見えて、木だかき松花の木、藤紅葉など、故ありてたち
交れり。疎かなる竹垣などし渡して、和やかなる入江の波か
ゝらん所に、世をつくさばやと、徒らに、心を動かすわざこそ
なほ、貫之のぬしにはもごかれぬべけれ。をりにつけたる眺
めは、げに墨がきの筆かぎりあるなるべし。今、この記にたく
ひても、委しきさまはかゝまほしげなり。

第十四 本居ぬしのもとにおくる

橋 千 蔭

雲居のよそに隔ちはべるものから、御名は、鳴る神の音に聞
きわたり侍りつ。おのれ千蔭はやく、賀茂のうしに、名つき送
りつれど、いと若かりし時のこゝろ怠りに、おろそかに物し
つゝ、なにはの事も、わいだめ侍らざりしほごに、おほやけご
ごにのみかゝつらひて、いごまなん成りにて侍れば、心
の外に、うごくなりもてゆきて、遂に、問ひ明らむる事もなく
て、大人、身まかられつれば、今はた、八千度悔ゆごもかひなく
なん。二十四ごせさきに、千蔭、やまひによりて、仕へをしごき
侍りしより、おほけなく、うしの心ざしを繼ぎてんご思ひ起
しつゝ、萬葉考をくり返し見はべるに、うしこゝらの年月つ

ごめ給へりし眞心はおぼろげならぬものから、齡ひの末に至りては、いかにぞや、誣ひ言にやとおぼしき事ども、交らひ侍りて、卷のついでなごかうがへられしは、いごごごわりある事ながら、はやく、今のついでになりぬご見え侍るを、わたくしに改むべきならずおぼえ侍れば、今の本のまゝにて、つばらなることは、考に譲りて、あらく、書い集め見侍りつれご、尙、たごく、しきことのみぞ多かる。さるたづきありて、玉の小琴といふ書を求めつゝ、見侍るに、聲きゝ知らんきは、侍らぬものから、誠に、及びかてなる調へになんおぼえはべる。そが中には、千蔭が、をちなき心に、ごあらんかゝらんご思ひめぐらしゝご、全くひごしきことしも、まれく侍り

て、よろこばひに堪へずなん侍る。されば、君の御名をあらはし書きつへうおぼえ侍るなり。おなじかごに遊べる友がきも、残り少くなりにて侍れば、殊に、今よりは、玉づさの便りからさゞらんを、武藏野の草のゆかりもおもほして、安濃の松原、つばらに聞えおこせさせ給ひねかし。

名におへる、渚の眞玉、ふごも、やつる、袖に裏みあへめや。日にけにさえまさり侍るを、よく凌ぎ給ひてよ。うちつけなるなめげさは、さるかたに見ゆるし給へ。あなかしこ。

第十五 千蔭ぬしへの返りごと 本居宣長

まづごよ、平かに物し給ひて、めでたき御よはひ重ねあげ給

へらん年の始めの喜び、なほ、八千代にこそさぶき申す。こゝにも事なくてなん。こそ冬の冬は、ふりはへさせ給へる御ふみよ。まだきに、春や立ちかへりぬるこ、思ひ給へかけぬ鶯の初聲より、けに珍らしく嬉しくなん承りぬる。いでや、縣居の友こそは、一させ、楫取の魚彦ぬしのごぶらはれしこ、村田の春海ぬしこそは、一たびのたいめもし侍りつれ。これらの人々をはなちては、たゞ、音にのみ聞きわたり侍る中に、君の御名はしも、殊に、富士の嶺の鳴澤ごなん、世に響くなるを、今までは、其のこそ、なくて、聞えさするわざも侍らざりき。さるは、はやく、御父ぎみのみもこに参り通ひし藤田某ごいふ者のつてに、をりくは、御あり様も承り、又、ちかきとし、安田ぬ

しの物がたりに聞き侍りしにつけても、いさゞゆかしくも、こより、學びの道にはなめげなれど、はらからこ、心にのみは、睦まじく頼もしく思ひ聞えさするを、千里へだたる雲居のほごにて、伊勢の海邊の友なし千鳥、故大人のなごりうち添へて、波の立ち居に、東の空のみ、なつかしくなん思ひ給へわたり侍る。近きごしごろは、閑かにこもりおはしますごか。宣長は、かひなき齡ひ六十に餘りはへれど、いまだ、家のなりをも、え譲りあへ侍らず、夜中曉ごいはず、はしりありき侍るに、物學ふいごますますなく、腰痛く苦しく侍るに、いごなん羨ましくおもひ給へらるゝ、誠や、大人の萬葉考書きつぎ給はんごや。そは、よろづよりもめでたく、たふごき御事、おなじ心に

いさううれしくなん思ひ給ふる。卷のついでのこと、宣長が思ひ侍るものたまはするごもはら同じことになん侍る。抑、大人の御しわざ、ごかくもごき侍るは、いごも恐くはべれご、さりさて、いかにぞやおぼゆるふしを、さて過さんは、中々に、彼の教へのこと、ろにもたがひてぞ侍らまし。よろづは、つぎく、に明らかになりゆかんこそ、學びの道のほいは侍らめ。おのが、試みに、片はし書きそめ侍りつる玉の小琴といふもの見給へるよし、もごより、いたりすくなきしわざは、御覽じごころも侍るまじきは、さるものにて、人の心は、古のもろこし人もいひけるやうに、おもての如く、さまざまになん侍るめれば、御心ご同じきことは、ありがたかるべく思ひ給

へらるゝを、もゝが一つも、さもごおぼさるゝふしの交り侍らんは、思ひかけぬ身のよろこびになん。さるを、名に負ふなごさの眞玉ごしものたまひかけたる、御言の葉のつゆの光りは、いごまばゆく耻づかしうなん。御返りごご、即ち聞えさすべく侍りつるを、年のくれさて、何くれのいそぎにかきまぎれて、今になり侍りぬる意りは、をりからにおもほしなだらめてよ、かへすく。

うれしさは、ほりかねの井を、思ふにも、汲む手にあまる、水ぐきのあご。ならしそめては、ならしばの、しはく、に、今よりはごたのもしくなん。あなかしご。

第十六 古文の評

竹取の物語、宇津保の物語、住吉の物語、とりくゝにめでたし、伊勢物語の、丈高くて力つよき、源氏物語の、えんにてたらひたるなどは、めでたきが中の、いとも愛たきにて、類ひなき筆あり。中つ世よりこなたの文にては、此の二つの物語の上におくべきは、絶えてあらずなん。大和物語は、すこし品おくれたるやうなれど、しかすがに、古ければをかしきふし多し。落窪の物語、ひこふしおりて見ゆ。狭衣の物語、させるふしもなけれごをかし。榮花物語は、ほかの作り物語書の同じつらならず、文詞のすなをなるご、かきさまの正しきごはさるものにて、作者の、目のまへに見聞きたる實事を寫しとりたるな

るからに、詞の學びに、えうあるはさらにもいはず、史の學びするかたにも、必ず見ではえあるまじきふみにて、いみじごもいみじきいさをし書なり。枕の草子、いごをかしき書なり。作り主の書きけんをりの顔つきさへおもひやられて。今昔物語は、上の諸物語ごは、さまごごにて此處にならへあくべき類ひならねど、初學の人の、文かき習ふには、便りよきふみなり。蜻蛉の日記のおもひゑめりたる、紫式部の日記の、心づかひ細やかなるは、各、とりくゝの筆なるべし。土佐の日記、いひしらずめでたし。後の世のかけても及ぶまじき口つきにて、げに、幾千歳の後までも、道の記のおやさあふぎつべく、たへつべき書なり。更科の日記、いさよひの日記、やゝくだり

ての世のなれごよろし。おほよそ、今の人のかくなる道の記は、多くは、此の二つの日記にぞならふめる。近き世の人にては、契沖阿闍梨の文、細やかにてめてたし。すべて、此の阿闍梨のは、心がまへのかりそめならずして、おちやうなるがめでたきなり。そのかみ、さばかりいみじく聞えおはせし何がしの中納言殿の仰せごごに、袖を拂ひて、そこらの賜物を、皆、貧者に施し惠まれたる人がらさへ見ゆ。多き中には、詞の、用ひ違へられたるなごもあれご、其のすちの學びは、初めて、此の阿闍梨の起されたるなるから、一人の手にては、さばかりゆきご、かずて、ごり落されたる方もあるへければ、其の方に、思ひなすべくなん。岡部の大人の文、漢めきたる處もあれご、

すべてのがたは、丈高く勢ひありて、高き峯の、大空に、ひごり聳えたちて、村山を、麓につけ従へたらんが如し。富士谷の翁は、いみじき上手なり。かゝれたる文、さしも多かれご、これはご取りすつべきは、をさく、見えす。文のさまはよく得られたりごいふべし。されご、高くおほらかなるかたはいかゝあらん。よの子、はた口をしからず。岡部の大人の許にて、物學べりしほど、千蔭ぬし、春海ぬしなごも、此の女房をば、心にくき方にいひあへりきごか。さもありけん。正しくまめやかにて瑕なきは、本居の大人の文なり。此の大人は皇國の道の學びは、さるものにて、詞のすちのこそをも論ひ定められたる功、世に類ひなくて、凡そ、今の文かき、歌よむ人の、此の大人の

蔭によらぬは、をさくあるまじうなん。千蔭ぬし、こごもな
くなだらかなれど、手よわし。春海ぬし、漢めきて、なつかしか
りぬさましたれど、筆すこしつよき所あり。高尚の宿禰、何の
ふしもなけれど、詞づかひのみだりなる所なごはすくなし。
濱臣は、一ふしありて見えたり。なほ、近く、世に聞えたる本居
の大平、萩原の廣道など、書ける書作れる文も多くて、めでた
きも、こゝら見ゆ。此の人々のほかに、見るひこのこゝろく
に、いひはやしもてさわぐめるかき手、いとおほかれど、ある
は、すがたはよろしきやうなるも、詞づかひ正しからぬ、或は、
始め終りゆきとほりたらぬ、あるは、一つ二つは書きえたる
があるも、多く見もてゆくまゝに、えもいはぬひがごごなど



いできて、むげに、拙くしな、くおもはるゝなごにて、これは
しもご難つくまじきは、いごすくなくなんありける。そもそ
も、先匠をしもごかくいひ評するは、たやすきやうにて、いご
くかしくおほけなきわざなれど、初學びの、まだ、何よけ
んごも、よる方しらぬほごなるが、うちつけに、誰れの集かれ
の文ごよみ見んに、其の人々のあるやうをも、かつく心得
おかずては、なかく、いみじき物ぞこなひをもしいでな
んごおもふまゝに、世のもごきも、えおもはでかくなん。見ん
人、さる方に罪ゆるしねごよ。(本朝文範)

第十七 卒業の學生を祝ふ 久米幹文

一日も離るまじき父母のものを、遙かに別れきて、五年六年の間、京に在りて、物學びするは、おぼろけの志しならめや。さるは、父母の深きめぐみに、こゝらのたからを費して、いそしみ勉めて、この學校の業を卒へぬるは、半、其の志しを成しつごいふべし。己れらだに、いごうれしきを、本國にある父母らは、いかに喜びつらん。さて、今より、また、専門の學校に入りて、二年、三年の日月を過ぐして、まここに、業を卒へんごする丈夫健男の伴よ。いそしめや。つごめよや。さて、世に學ぶべき道々は、あまたあれども、その要を得ずば、かひなかるべし。我が御國の大道は、君臣の義を重しごし、父子の親は、これにつぐものごす。この二つの道を、さごらざる時は、たごひ、千萬卷

の書をよめるも益なし。あやしく妙なる藝術をまなべるも、いたづら事なり。

然るに、今の世人は、西洋の書をむねご讀むからに、君臣のわいだめ、正しからぬ國風に目かれて、天つ神の正統ごおはします。我が天皇をも、あだし國の王ご、ひごしなみに思ひごり、または、かの國の教へになづみて、父子の道のたふごき事も打ち忘れて、唯、夫婦の外に、重くすべき道はなしごやうに思へるもあり。もし、かゝる邪なる道にふみまごひて、我が、直く正しき國風をわすれたらんには、中々に、學ばざる人におごるべく、はた、人をあやまり、國をそこなふに至るべし。我が國は、神代より、東の海中に離れ立ちて、君臣のこごわり、はや

く定り、父子の親み、いや深くして、あだし國びこより、君子の國、禮儀の邦といはれつるに、たましく、天の下の大政、古さまにかへりて、今は、こささらに、大御稜威を、萬國に示すべき時なるに、世の人、心うつけて、しごけなく、氣力なえて、つたなからましかば、國人のおもなきのみかは、國家の恥辱ともなりぬべし。
されば、丈夫健男のごもよ。今より、何業を學ぶごも、いかなる藝を習ふごも、この二道をいたごもちて、いきの限り忘れず、はふらさず、あはれ咲きこぼれたる櫻花の、豊さかのぼる朝日に匂ふが如く、みやびたる心をもちながら、から人の、神ごおちかしこむ虎をも、手ごりに、ざるばかりなる日本魂を

らんやうと

朝日匂ふが如く
みやびたる心も
もちながら

天皇又上杯
天皇又上杯

朝日匂ふが如く

ふりおこせかし。さて、他し國人をして、我が天皇を、世界に、上なき大君ご仰がしめ、我が皇國を、世界にならびなきおや國ごたへ奉らしめんこと、豈かたからめや。今日の卒業式の序でに、あらましごを、一言申すになん。

太平の曲

志貴皇子の懽びの御歌

石ばしる、垂見のうへの、さわらびの、

もえ出づる春に、なりにけるかも。

詔に應へ奉れる歌

海犬養岡麻呂

御民われ、生けるしるしあり。天地の、

さかゆる時に、あへらくおもへば。

勇士の名を振ふを慕へる歌 大伴家持

丈夫は、名をし立つべし。のちの世に、

きつぐ人も、かたり續ぐがね。

Handwritten text in cursive script, likely a commentary or related text.

Additional handwritten text in cursive script, possibly a signature or further notes.

文章論

(廿三年二月稿)

小中村清矩

箇様に、題は掲げましたが、今日申すことは、格別新しい説が有るのではありませぬ。たゞ、我が國の文章は、むかしは、目で見ると、耳で聞く方が多かつたこと云ふことを、申すのであります。付いては、我が國の文章の體の、古來より沿革し來れる次第を、一通り説きませう。併し、文章の沿革を聞いたことも、格別、今世の益になることは有るまいと思ふ様な方も有りませうが、今日の世界は、種々の歴史を作る事が流行致しまして、近頃は、小説の歴史、園藝の歴史、食物の歴史までも出来る様な有り狀の社會に、文章ほど、一日も缺くべから

ざるものは無いから、必ず沿革をたゞして、歴史を考へなければならぬと思ひます。併し、今日申すことは、歴史と云ふほどの精しいことでは無く、たゞ此の時代には、言文一致體であつたのが、此の時代に、漸く分離して、斯ういふ文體となり、漢語を専ら使用する世となつては、かゝる體であつたと云ふことのみを述べるのであります。又、當今、文章論の必要なことは、近ごろ、諸方の人が、専ら、我が國の古事を考へやうと思ふ氣運に向つて、參り、地方の中學校、師範學校に於て、國語や、日本歴史の教科を、盛んにし、追つては、小學校にも及ぶべき形勢でありますから、都下にも、國史、國文の傳習所、又、講習所など、標札を掲げたものが、あちこちに見えて來ました。

これは、國粹保存主義あたりから、先年の西洋熱がさめて參つて、さういふことになつたので有りませうが、又、外國人からも、主唱して、學問の順序は、他國を後にして、自國を専らにせんければならぬと云ふ所から、斯ういふ人氣に向つて參つたことで有りませう。さすれば、此の時に當つては、及ばずながら、右等の學を擴張致さんと思慮するは、吾が輩の今日の務めであると思ひます。

さて、私が、今日述べることは、先年當所に於て講演したる、古代文學論と、近來發行になつた、日本文學起原などの旨を、猶敷衍して申します。付いては、少し、御迷惑なところには、折々、古文を讀まなくてはならぬ。それは、此の時代の文體は、斯うい

ふ風だと言つたばかりでは分らぬから、正の物を、正で御目に懸け、否、御聞きに入りたいによつて、己むを得ぬ譯であります。併し、古書の文は、いつでも讀める。今日は、演説を聞く爲に、雪が降るのに、わざ／＼來たのだ。文を讀むのを聞くことは不本意であると思はるゝかも知らぬが、文では無い、私の詞だと思つて御聞き下さい。尤も、成るだけ面白い、長くないのを讀むことに致します。しかし、名文の所を撰んだ譯ではない。大かた、目に附いたのを持ち出した譯であります。さて、文章の沿革を申すには、上代から申さんければならぬが、上代の文章は、未だ、普通の文字無き頃にて、言語を以て述べたるにより、耳で聞く方あります。それは、上代の人とても、何

か、事ある時に述べる言詞は、少し、飾る氣味が有りまして、平常に云ふのとは違ひます。これが、取りも直さず、我が國の文章の起原にして、即ち、言文一致とも云ふべき者であらうと思はれます。其の文章めいたものは、何かと云ふと、祝詞と壽詞であります。祝詞とは、後世は、神に申すことに限る様になりましたが、元來、ノリトといふ詞の義は、宣説言で、上代は、何事にもあれ、事を述べた時は、成りだけ面白く、聞く人に感を起こさせるやうに云つたのが祝詞で、それ故、青雲の靄く極み、白雲の墜居向伏す限りなごご對語を用ひ、又、冠辭といつて、足百ず八十ごか、眞髮ふる奇稻田媛なごご申して、あやをなしたるものであります。壽詞とは、吉言の意にして、往昔、御即

位、又は、大嘗會の時、神代の舊事を述べて、御祝ひ申す言詞なれば、かく稱する譯である。此の類の詞に、神壽カミコトと云ふは、昔、出雲の國造の朝廷に出て申した詞で、室壽ムロコトといふは、新室ニホムを造つた時に、諸人の祝ふ詞であります。中にも、日本紀の顯宗天皇紀に見えたる室壽ムロコトの詞などは、殊に、古雅なものであります。詔ミコトノリと云ふは、天皇陛下の御言ミコトノコトを、衆人に宣り聞かす義である。續日本紀といふは、文武天皇以來の事を記した歴史であるが、其れには、宣命ノボリと云ふ言詞のミコトノリミコトノリと、漢文の詔ミコトノリと、二様に書いてある。これに由つて思へば、日本紀に記してある神武天皇以來の宣命の詔は、もと、宣命の體で、詞で傳へたる

を、日本紀を作るごきに、其の詞の意を、皆、漢文に譯したるものと思はれます。それ故に、註解したものを見るに、此の文は、後漢書から出たごか、此の句は、晋書から採つたごか云ふごかが、ちきに知れる。これは、當時、専ら、唐土の風に據られたから、日本紀も、立派な漢文にして、外國人に見せても、耻かしくないやうにご書いた故であります。さて、斯う述べたばかりでは、其の時代の文體が分らぬ。何か御目にかけてやうと思つて、あれこれごみました中から、昔、大嘗會の時の中臣壽詞ナカノミコトノコトの文を取り出して、此へ掲げませう。大嘗會は、今に至るまで、歴然たる朝家の大典で、其の年に收獲したる新米を以て、製した供物を、天皇、親ら、天神、地祇に奉り

給ひて、のち、陛下の聞し召して、臣下にも賜はるを、新嘗祭といひ、御代の初め、殊さらに行はるゝを、大嘗會と申します。其の大嘗會の儀式の中に、中臣氏が出て、神代の故事を述べる事のあるを、中臣壽詞と云ひます。昔は、其の詞も、さまざま有つた事であらうが、今は、亡び失せて、僅かに、保元時代で、よく人の知つて居る、宇治の左大臣頼長公の台記といふ日記に、一篇を載せてある。台記は、後のものであるが、其の文は、古く傳へたまゝを述べたものと見える。先年、古代文學論の時には、古文の證據に、法隆寺の薬師佛の銘、並びに、繡帳の文を出しましたが、今日は、言文一致にあつて居るものを、御目にかげませう。但し、古文は、さかく、神の事が多いから、此の壽詞も、

やはり、其の趣きで有ります。我が國の上古は、敬神を以て、國の基とした故に、何事に附けても、神の事に關係してあるのは、西洋書を讀むと、耶蘇教のことに連累してあることが多いのと、同じ様なものであります。

此の文は、前と後とを省いたのである。最初の文の天降坐とは、天孫瓊杵尊の此の國へ降臨の事を申すのであります。

中臣壽詞

天降坐之後、仁中臣乃遠都祖天兒屋根命、皇御孫尊乃御前仁奉仕、且天忍雲根神、天乃二上仁奉、上且神漏岐神、漏美命乃前仁、受給、里申仁、皇御孫尊乃御膳都水波、宇都志國乃水爾、天都水邊加且奉、止申、事教給、仁依、且天忍雲根神、天乃浮雲仁、乘、且天乃二上仁、上座、且神漏岐神、漏美命乃前

仁申ニニ世セ乃玉ノタマ櫛シ遺ヰ事コト依ヨリ奉ツ耳ミミ此玉コノタマ櫛シ遺ヰ刺シ立タテ耳ミミ自ヨリ夕タタヒ日ヒ至マデ朝アサ日ヒ照ス萬マン天アメ都ツ詔ミコトノコト
戸ド乃太ノタ詔ミコトノコト刀タガ言コト遺ヰ以モ且ナ告ツ禮レ加カ此告コノツケ波ハ麻マ知チ波ハ弱ヨク赫セク仁ニ由ヨリ都ツ五イ百ヒヤク篋カ生ナマ出イデ幸ム自ヨリ
其下ソノタラシ天アメ乃八ノヤチ井イ出イデ幸ム此遺コノツケ持テ天アメ都水ツツミ止ト所聞コト食シ止ト事コト依ヨリ奉ツ支シ

これで見ると、飲料水に、心をつけることは、神代でも有つた
と見えます。此の詞を、字に寫すには、まだ、平假字も、片假字も
ない時代でありましたから、餘義なく、漢字で、詞を書き綴つ
たもので、元來、我が國の上古には、一般通行の文字は無かつ
たが、應神天皇の御代に、漢籍が渡つてから以來は、世間の事
も、言葉も、漢字で書きしるすことになりました。それ故、歴史
に、履仲天皇の時に、史を、諸國に遣して、言事を記さしむこと
あり。又、諸家ともに、先祖以來のことを記した纂記などといふ

もの、書體も、大かたは、此に掲げたやうなものであらうと
思はれます。

さて、孝徳天皇の時に、維新の政がありまして、上代の風を改
革し、制度萬端を、唐風に御移しにあつたに付いては、律令格
式も、歴史も、詔勅も、官符も、すべて、立派な漢文になり、大學寮
を建て、學生に、漢學を勉めさせるといふ形勢であつた故、此
に於て、耳ばかりで無く、専ら、目が入用の事になりました。か
つ又、言文二途に分れたのも、此の頃からでありませう。
併しながら、大寶の學令を見るに、大學寮に入つて、學業をす
るは、五位以上の子孫と、大和、河内の史部といつて、前代以來、
史官、又は、博士であつた家筋の子に限り、六位以下、八位以

上の子は、情願に依つて許す位なものであつた故、然るべき身分にて、青雲を望む志しの人の外には、餘り漢學が廣まらなかつた様に見えます。其の時代の中等以下の人に、學問が無かつた證據は、奈良の朝に造つた、碑銘、墓誌の類の、今、現存し、又は、土中から、折々掘り出したのを見ると、其の文は、純粹の漢文は、少く、専ら、古事記體に書いてありますが、此れは、漢文の出來ない人が、多かつたから、自然、かやうの體をなしたものでありませう。況して、其の頃の女などは、字を知らぬ者が多かつたらうと思ひます。さて、其の後、追ひく、漢籍の學問が盛んになつたが、其れを讀むには、今、西洋の原書を讀み、又は、佛經を讀む如くではな

く、専ら、訓讀でありました。それ故、論語を讀めば、とても、學びて、時に之れを習ふ。亦説しからずや」と云ふは、ごんご、假字草子を讀むと異ならぬ譯では有りませんか。元來、昔の博士は勿論、徳川時代の始めの惺窩、羅山以來、とても、成るべく、訓讀にして、傍らに聞いて居ても、文義のわかるやうにしたもので、たごへば、詩經の首めの關雎の章を讀むには、關々ご、やはらげる、雎鳩のみさごは、河の洲に在り。窈窕ご、たをやかなる淑女のをごめは、君子うまひごの好述よきたぐひなり」といふ類に讀せた趣きは、道春點、其の外、古點本を見れば知れます。然るに、後世に至つては、文義は、別に、講義があるから、訓みは、簡短に約めて、學生の覚え易いやうに、この主義に、自己の

臆見を加へて、注釋に協ふやうにしたもの故に、かた言で、一向、語を爲さぬ所もあり、又、古さは、あちらこちらで、なるべく、音にて讀む故に、耳に聞いては、こんご分らぬ事が多い。猶、立ち返つて、昔、訓讀を尊んだ事を申さう。若かし、今の人には、あまり馬鹿々々しいことゝ思はるゝかも知らんが、今日は、あくまで、昔の文章は、耳の用を専らにしたといふが、談しの主意で有りますから、其のつもりで、御聞き下さい。さて、今昔物語に、昔、菅公の御作の「東行西行雲眇々。二月三月日遅々」といふ詩を、北野の神前にて吟じて、通夜したる夜に、け高き人顯れて、其の詩句は「ござまに行き、かうさまに行きて、雲はるばる。ささらぎやよひ、日うらうら」と讀むべしと教へた事を載

せ、又、唐の張文成が作れる遊仙窟といふ小説めきたる文章の、嵯峨天皇の頃、大いに流行した所が、天皇、紀傳道の儒士を召して、其の讀みを受けんと思しめしたけれど、誰れも、よく讀む者がなかつた。この時、伊時といふ博士、七日の潔齋をして、木島の社に詣り、其の傍らに端坐せる老翁に就いて、其の讀みを得たる由、刊本の尾に載せてある。此の書の訓も、斜眼ごにらみ、頻々ごしばしばの類である。これらは、夢に託し、神に託したもので有りませうが、昔は、耳で聞く方が専らであつたによつて、かやうに、讀みに刻苦したといふ故事に引き出して、考證に備へます。

奈良の朝の末より、片假名平假字が起りました。此の事は、古

代文學論の時に、精しく述べましたから、今日は略します。さて、さういふものが出来て、言詞のまゝを、すぐに書き寫す便利の世になりましたから、假名文の様なものを、追ひく、人が書いた事でありましたらうが、多くは、拙くて、後世に傳はらぬので有りませう。然るに、紀貫之は、其の文體に、一機軸を出したのが、古今集の序や、大井川行幸和歌の序などで、それから、次ぎくに、竹取物語や、空穗、伊勢、源氏の様なものが、出来ましたが、物語といふ名稱は、取りも直さず、話しといふ事で、人に読んで聞かせたのでありませう。それは、昔の貴人方は、深窓に居られたもの故、世間の事を知らせがてら、又、徒然を慰めがてら、才學ある者の著して、讀んだものなれば、物語

は、専ら、耳のためであります。此の類の文章は、人のよく知つて、居ることなれば、今は、例を掲げませぬ。又、其の頃、専ら流行せる佛家の和讃など云ふものは、謠ひものと同じく、聞いて信を起すもので、讀經懺法の類とても、皆、耳を尙ぶ方であります。併しながら、此の頃の假名文の作者は、女の方が多い。其の故いかに申すに、男子は、漢學をして、其の故を専らとするにより、假名文を書くのは、學者らしくない所から、内々では使つても、表だつては、假令、古事記のやうな和漢混淆の文なりとも、それを使用して、丸での假字文は、あまり、人に示さなかつたものに見える。其れゆゑ、大鏡なども、藤原爲業が作つたものであるといふが、名を顯さぬのは、その故でもあ

りませう。併し、日用の文章、雜記などは、さうも言はれぬから、追ひく、男でも、假名を交せて書く様になりました。その一つをいはゞ、今昔物語は、宇治大納言隆國の作で、元來、暑さ凌ぎに、夏は、別莊に住んで、諸人の雜談を聞くを、何よりの慰みにして、其のまゝ書いたものであるから、虚實相半して居る隨筆の類で、此の作者は、紫式部の時代より、僅か、四五十年後れたる、後冷泉天皇の頃の人であるが、源氏の文から見ると、よほど違つて居ります。其の一章を讀んで見ませう。

今昔物語卷廿六於但馬國鷺鷹取若子語

今は昔、但馬國七美郡川山の郷に住む者有けり。其の家に、一人の若子有て、庭に腹這けるを、其時に、鷺鷹空を飛で渡ける間に、此若子の、庭に腹這を見て、飛落て、若子を囓取て、空に昇て、遙に、東を指て飛び去にけり。父母、此れを見

て、泣悲むで、追ひ取らんと爲るに、遙に、昇にければ、力不及して止にけり。其の後、十餘年を経て、此の鷺鷹に被取にし若子の父、用事有るに依て、丹後國加佐の郡に行にけり。其の郷に有る人の家に宿す。其家に幼き女子一人あり、年十二三許也。其女子、大路に有る井に行て、水を汲むと爲るに、此の宿たる國但馬の者も、足を洗はんが爲に、其の井に行ぬ。然る間、其郷の幼き女の童共、數多、其井に集り來て、水を汲に、此宿たる家より來たる女子の持たる鑪を、其の郷の女の童部奪ふ。家の女子、此れを惜で、不被奪と諍ふ程に、郷の女の童部共、同心にして、此家の女子を罵て云く、己は鷺鷹の噉ひ殘しぞかしと云て、誓り付つ。家の女子被打て、泣て家に返る。此の宿たる但馬の者も返ぬ。家主、女子を、何の故に泣と問へば、女子、泣のみ泣て、其故を不答へ。其時に、但馬の宿人、見つる事なれば、有つる様を、具に語て、亦云く、抑も、此女子をば、何の故に、鷺鷹の噉ひ殘しとは云ぞと問へば、家主答て云く、其の年の、其の月の、其日、己れ、鳩の櫛に、者を落たりしに、若子の泣く音の聞えしかば、其の音を聞て、櫛に寄て見侍しに、若子の有て泣しを取り下して、其れを養ひ立て侍

る女子なれば、郷女きよのめ童部も、其を聞き傳て、此く置立て申す也と云を、此の但馬の宿人、此を聞くに、我こそ、先年に、子をば、鷲に被取てと思ひ廻すに、其の年、其の月、其日と云を聞くに、彼れ、但馬國にして、鷲に被取し年月日に、つふと當たれば、我子にや有らむと思ひ出て云く、然て、其の子の祖おやと云ふ者や、若し聞えしと問へば、家主、其の後、更に然か聞ゆる事不待と答ふれば、宿人の云く、其の事に侍り、此く宣ふ時に思出侍る也とて、鷲に、子を被取し事を語て、此れは、我が子にこそ侍るなれと云に、家主、系、奇異くて、女子を見合するに、此の女子、此宿人に、形、露たが違たる所無く似たりける。家主、然れば、實也けりと信じて、哀がる事无限。宿人も、可然くて、此に來にける事を云ひ次けて、泣く事无限。家主も、此く、機縁深くして、行き合へる事を悲むで、惜む事无くして許してけり。但し、我も、年來養ひ立つれば、實の祖に不異、然れば、共に祖とし可養也と契て、其後は、女子、但馬にも通ひて、共に祖にてなむ有ける。實に、此れ難有奇異かき事也かし。鷲の、即ち噉くひ失ふべきに、生い乍ら、權に落しけむ、希有の事也。此れも、前生の宿報にこそは有けり。父子の宿世は、此くなむ

有けると語り傳へたりとや。

なんと、源氏物語の文體とは、殊なる違ひではありませぬか。今の文は、讀んだばかりで、随分分りませう。源氏や、竹取は、講釋でもきかねば分らぬが、これはいかゝる故かと考へまするに、うつばや、源氏の物語は、成るべく、上等社會の雅みやびなる詞を用ひて、文句にも、種々のあやをなし、巧みに面白く作つた、こしらへ物故に、今の世となつては、分らぬのでありませう。今昔物語は、談話のまゝを、文に綴つたものなれば、強ひて、巧みを用ひず、多く、常の語を以て書いた雜記の故でも有りませうし、且は、男子の書いた口氣の、おのづからみえるやうに思はれます。されば、後冷泉天皇の頃の平常の假字文は、此の

やうなものでありましたらうが、尤も、今昔物語は、後の人が、
増補したと云ふ説もあるが、其れは、同人の作なる、宇治拾遺
物語の方であります。但し、此の書は、隨筆雜記であるから、箇
様に認めたので、男子は、此の頃とても、いまだ、表立つたもの
は、漢文に書き、能はざるものは、混交體に書きました。

軍記の始めともいふべきは、將門記で、これは、天慶の亂より、
四五十年位を経たもので、あまり遠からぬほどの著述と思
はれます。少しばかり書いて見ませうが、漢文でありますけ
れども、これが、盛衰記や、太平記の文體の原と思はれます。

將門記

苟將門、利帝、苗裔、三世之末葉也。同者始自八國、兼欲虜領王城、今須先奪諸國

國、印鑑一向受領之限、追上於官塔、然則且掌入八國、且腰附萬民者、大議已訖、
又帶數千兵、以天慶二年二月十一日、先渡於下野、國各騎如龍、之馬皆率如雲、
從也。揚鞭催蹄、將越萬里之山、各心勇神奮、欲勝十萬軍、既就於國廳、張其儀式、
于時、新司藤公雅、前司大中臣全行朝臣等、兼見欲奪國氣色、先再拜將門、便擊
印鑑、跪地奉綬、如斯騷動之間、館內及府邊、悉破虜領。

總へての文體が、此の様であります。一向、騷動、氣色など云ふ
漢語は、此の頃、既に、日用の語となつて、今の世までも、専ら使
用する事と思はれます。此の文などは、耳で聞いても分るが、
先、目で見る方であらうと思ひます。

又、此の頃、然るべき人たちの日録の體をみるに、將門記など
よりは、和漢混淆の文で、或は、邦語を挿入した所も有るが、總
べて、假名では書かなかつたものであります。武家の世とな

つては、益、混淆で、東鑑の類は、和文ともつかず、漢文ともつかぬ様であるが、併し、これ等は、目で見ても、耳で聞いても、兩用に便するやうであります。

鎌倉の幕府の世になるに、餘ほご、假字の文體が違つて來て、今昔物語の様な文體で、益、行はれたものと見える。其の中で、建長年中の作の、古今著聞集を、少し讀んで見ませう。

古今著聞集卷十一

同御時、繪難房といふ物有り、いかによく書たる繪にも、かならず、難を見いだすものなりけり。或時、古き上手共の書たる繪本の中に、人の、犬を引たるに、犬すまひて、ゆかじとしたる體、まことに、いきてはたらくやうなり。又、男の、かたぬぎて、たつきふりかたげて、大木を切たる有、法皇の仰に、是をば、繪難房も、力及ばじ物をとて、即、めして見せられければ、よく見て、目出度は

書て候が、難少々候。これ程すまひたる犬の首繩は、したはらのしたより、よくひきすごされ候べきなり。是は、犬はすまひて、頸繩、普通なる體に見え候也。又、木切たる男、目出度候。但、これほどの大木を、なからすぎ切入て候に、只今、ちりたるこけら計にて、前に散つもりたるなし。これ、大なる難に候と申ければ、法皇、仰らる、事もなくて、繪ををさめられにけり。

なんご、今昔物語から見るに、又一層、今の言詞に近くなつて居て、讀んでも面白く有りませう。もう、此の時分には、「候」と云ふことが多くあつて居る。これは、古く、「侍る」といふ詞の轉じて來たもので、「侍る」も、「候」も、共に、敬語で、上にたつ人に向つて云ふ時の詞である。源氏の時分には、「ドウ侍る」「カウ侍る」でありました。後には、「何候」と云ふ様になり、手簡文や、謠曲や、能の狂言などに、うるさいほど、「候」と云ふことがあるが、もごは、

丁寧に言ふ所で無ければ、使はなかつたものであります。此の時代に出来た軍記で、源平盛衰記の類は、やはり、物語の類で、ここに、讀みばえのするものであります。殊に、平家物語は、節附けをして語るもので、後の淨瑠璃の祖であるから、耳の爲なる事は云ふまでもない。今、盛衰記を、少しばかり讀みませうが、これは、義仲の所へ、猫間中納言が行つた話してあります。

源平盛衰記卷三十三

木曾冠者義仲は、かほ貌形は清氣にて、美男也。けれ共、堅固の田舎人にて、淺ましく、かたくな頑にをかしかりけり。信濃國木曾と云山里に、二歳よりして、二十餘年が間、隠居たりければ、人に馴る事はなし。始て、都の人に馴れめんに、なじかは、誠によかるべき。かたくな、るこそ理なれ。猫間中納言光隆卿、宣べき事有

て、木曾が許へおはして、先、雜色して、角と云入られたり。木曾が郎等に、根井と云者、聞繼で、主に語ければ、木曾意得すとて、なまり音にて、「何、猫のきた、猫とは何ぞ、鼠とる猫か。旅なれば捕すべき鼠もなし。猫は、何の料に、義仲が許へは來るべき。但、人を、猫と云事もやある」と云ければ、根井も、びに心得ずと思て、立歸て、雜色に問様は、「抑、猫殿とは、鼠取猫か。人を猫殿と申か」と、御料に意得すと、瞋り給なり」といへば、雜色あな頑カクマや、をしへんと思て、「七條坊城、壬生邊をば、北猫間、南猫間と申。是は、北猫間におはします程に、在所に付て、猫間殿と申なり。譬ば、信濃國木曾と云所におはすれば、木曾殿と申様に、是も、猫間におはしますせば、猫間殿と申なり」と、細々に教ければ、根井意得て、此様を申。木曾も、其時意得て、見參に入奉りけり。暫、物語し給て、木曾、根井を招て、「や、給へ。なんでまれ、饗し申せ」と云。中納言淺ましと思て、「只今、宣ことあるべしとありけれ共、如何、食時にましたるに、物めさではあるべき。食べき折に食ざるは、糧なき者となるなり。疾急イキげ」と云。何も生なましき物をば、無鹽と云ぞと心得て、「無鹽の平茸もありつな。歸給はぬさきに、早めよ」と云ければ、

中納言は斯る由なき所へ来て、耻がましや。今更歸らんも流石なりと思て、
宜ふべき事も、はかばかしく仰られず。興醒て、堅睡を吞ておはしけるに、い
つしか、田舎合子の、大に、尻高く、底深きに、生塗なるが、所々ははげたるに、毛
立たる飯の、黒く、糲交なりけるを、堆く盛上て、御菜三種に、平茸の汁一つ、折
敷に居て、根井持來て、中納言の前にさし居たり。大方、とかく云計なし。木曾
が前にも、同く備たり。木曾は、箸取食けれ共、中納言は、青く興醒てめさず。木
曾、是を見て、如何、猫殿は饗さるぞ。合子簡給か。あれは、義仲が、随分の精進
合子、あたにも、人にたばす。無鹽の平茸は、京都にはきこなき物なり。猫殿只、
搔給へ〜と勸たり。いと、穢はしく思給けれ共、物も覺えぬ田舎人、食す
して悪き事もぞあると、思はれければ、めす體に、翫て、中底につき散し給へ
り。木曾は、散飯の外には、何も残さず食畢。戯呼、猫殿は、小食にておはしけり。
去にても、適おはしたるに、今少搔給へかしと申下略

保元平治物語、太平記以下の軍記、又、曾我物語、義經記の類の
文體は、大かた、これと同様で、目で見ても面白く、又、昔の物語

の如く、人に讀ませて聞いても、いつかごの慰みとなつた物
故に、馬琴なども、専ら、此の時代の言文を採つて、小説を著し
ました。盛衰記の詞に附いて、いさゝか、詞の話しに移ります
が、エツボニ入ル、ヤナレ、モノモノシヤ、オメオメ、ヤニハニ、マ
ツサカサマ、などいふ詞は、古くはみえない。全く、此の時分か
らで、恐らくは、關東武士などが、大勢、京都に入り込んでから、
國詞の交つたもので、無いかと思ひます。又、今日に使用す
る漢語は、多くは、盛衰記や、貞永式目の類の、此の時代の書に
あるもので、試みに、其の一つ二つを申せば、意趣、虚言、安穩、推
量、究竟、不道、神妙、不足、殊勝、鼻負、扶持、催促、理不盡、過分、口論、惡
口、露顯、知行、斟酌、猶豫、停止、喧嘩、などの類の文字であります。

此の他にも、家記類を搜索したならば、多く有るであらう。尤も、これ等の詞は、其の時代前から、追ひくゞと、使ひ慣れたものと思はれます。さて、右のやうな文體になつた時代にも、やはり、源氏や、枕の草子のやうな文があります。方丈記十六夜日記、徒然草の類である。其の時代に、浄土の三部集と云つて、自分の宗門に付いての法談を書きました。が、詞づかひの雅なる事、綴りの巧みなる事は、古へにも稀れなるほどの物であります。が、其中の、父子來迎と云ふ篇は、阿彌陀を親と立て、衆生を子として、臨終來迎の意を述べたものであります。それを、少しばかり。

父子來迎上

あはれ、わづかなる名利のために、はかりなく、心ぐるしからんよりは、ひたふるに、たゞ、世をすてねかし。さてぞ、思ふ事もあるまじかめる。つたなからん人のもごきを、なごかすこしもいたみとせん。そしるも、そしらるゝも、ともに、つひには、すて、ゆく身のかばねの上に、おとしむるきずも、のこらばのこれ、それをはゝかる心こそ、かへりて、後世のはぢとはなるめれば、すてぬは、すつるにてありけるも、あたら身ぞかし。後の世も、はた、たのもしからんに、やはしかむいかに、も、捨て、こそ、のひとことばは、よく、き、すぐしが、たくこそおほゆれ。たゞ、この、すつといふ文字が、まことの道の、のりにては、あるを、人ごどに、まなびかねて、やすかるべき世に、くるしみあひたり。せん、するところ、よろづの、わづらひは、心ひとつより、おこれるゆゑに、世をすつといふは、たゞ、こゝろをすつるなり。

これは、今聞いても、よく分りますまい。若かし、此の時代の上等の人には、此の文體の方が、感情を、深く起させるにより、作

者の心ありて、わざと此の體に書いた者であらうと、古人も評しました。此の外にも、また古體の文を書く人が多くありました。あかし、其れ等は、歌を詠む人か、女や僧に多いやうに思はれます。こゝに於て、雅文と俗文との區別が出来て、源氏物語枕草子の類の文體を雅文と言ひ、盛衰記の如く、漢文を多く交へ、又は、通行の詞も交へて作つたものを、俗文と言ひます。雅文は、從來、和文と稱し、現今も、國學者の作る文章は、専ら、これでありませう。これは、古來の體によつて作るものでありますから、世間で、これを擬古體と申します。上古の言文一致が變じて、一つの文章となり、其れが、年を経て、雅文俗文と別れたは、かういふ所由であります。

神皇正統記は、御存じのもの故、讀みますまい。さて、足利時代の一條禪閣兼良公は、至つて、博識篤學な御方であつた故、神儒佛の三道に通じ、有職故實の朝儀を明らかに、種々の著述もありませうが、中に、足利義尙將軍の、江州の佐々木高頼を征伐の時に、招請せられて、陣中で、經書の講義をし、又、政道の心得にも、こゝ、樵談治要といふ書を作つて與へた、其の書の中を、少し讀みませう。

樵談治要

一、諸國の守護たる人、廉直を先とすべき事。

諸國の國司は、一任四ヶ年に過ず。當年の守護職は、昔の國司に同じといへども、子々孫々に傳て、知行をいたすことは、春秋の時の十二諸侯戰國の世の七雄にことならず。所詮、賴朝の大將、後白河院の勅諭として、六十六ヶ國

の總追捕使に補せられしよりこのかた、守護職といふは、武將の代官をうけたまはれる由にて、當代にいたるまでも、其例を逐はるゝうへは、はやくさだめおかれたる御法をまもり、かぎりある得分の外は、そのいろひをなさず、上には、事君の節をつくし、下には、撫民の仁をほごして、廉直のほまれ、當世に聞え、隱徳の行、末代に及さば、冥慮にもかなひ、榮花を、子孫につたふべきをや、もすれば、無道をかまへ、猛惡をさきとする事、かへすがへす、しあんなきにあらずや。

これは、目で見ると方に近いから、漢語が多い。いはゆる漢語交りの文ではあるが、和らかなもので、神皇正統記とや、同體であります。徳川の世に、新井白石の書いた文は、斯ういふものを手本として、一家の體を爲したのであります。よつて其の應用を知らせる爲に、白石の藩翰譜をいさゝか。

藩翰譜

國千代殿、いとけなく渡らせ給ひし時、鐵砲うつ事を、稻富に學ばせ給ひ、元和四年十月九日、西城の隍の邊に、嶋のいでありしを、こなたの橋のうへより、鐵砲にてうたせ給ふに、あやまたせたまはであたりぬ。ふかく悦ばせ給ひ、御母上の御方に參らせらる。御臺所また、悦ばせ給ふ事、淺からず。此夜將軍家入らせ給ひしに、彼嶋を、御あつものにした、めて、御酒す、めらる。國千代君の手づから得給ふよし、聞しめし、將軍家も、御心地よげにて、さるにても、いづくにてか得たりけん。抑、我城は、父御所の新に修し、築かせ給ひ、我にゆきこしめしもあへず、御箸をなげ捨給ひ、何者の供に侍ひて、かゝるふしぎをばふるまはせたりけん。抑、我城は、父御所の新に修し、築かせ給ひ、我にゆづらせ給ひ、我また、竹千代殿に參らすべき所なり。それに、國千代が身として、其城にむかひ、みづから、鐵砲をはなつ事、上は、天道にそむき、且は、父御所の神慮のほごもはかりがたし。下は、竹千代殿のかへり聞きたまはん事も、其は、かりなきにあらずと、以の外に、御氣色そこねて、御座をた、せ給ひ、

その日、彼御供に侍ひし人々たゞされて、御不審をかうぶる。其時、御前にありあふ女房たちの、後に、老いて家に有りしが、御臺所の御方にて仰せられし事かゝりとは語りしなり。又、物語は、世にも、遍く知れる所なり。此言葉にて、寔に深き御心の中をおしはかりなば、世の傳ふる所の聞きひがみなるを知るべきなり。

白石は、漢學の先生で有るから、中古の假字文などを、骨を折つて讀んだ事はありますまいが、假字で書いたものを、多くみた上に、才學のちからで、自然と、一家の文を爲して居ります。ここらで、沿革は終へませうが、これまで、數章讀みました。文は、大抵、耳で聞く方であらうかと思ひます。

徳川時代は、泰平の世で有つたから、種々の文事も起りました。眞淵、宣長、千蔭、春海の類の國學者、數多、世に出でて、かの雅

文も盛んになりましたが、それは、今の通行文にはならぬ故、漢文を書くと同じく、今日では、一種の藝の様なものであります。併し、これは、我が國の文法の本であるから、たゞこひ、今の通行文を書けば、こても、此の雅文から考へて書かぬと、文法語格を誤つて、意も通ぜず、へんちなものになります。文を書くからには、よもや、文法にも、構はず、意も通ぜずともよいと云ふ人はありますまい。それ故に、文法の本を知るには、雅文も必要でありますから、現今、中學校以上の學校で、土佐日記や、竹取物語を讀ませるのは、其の爲の修行と思はれます。維新の後には、専ら、漢文直譯體の文が行はれて來ました。即ち世にいふ漢文體で、此の文體は、目で無ければ、こんご分りま

せぬ。新聞を見ても、雜報は、言文一致に近いから、聞くばかりでも分るが、論説は、漢文體であるから、聞くばかりでは、義を間違へることがあります。此の漢文體は、維新より後に、最も多くなりました。これは、所謂、文明の世になつた故で有りませう。然るに、孝徳天皇の維新の時は違ひ、世間の人が、専ら、洋學をせねばならぬ故に、面倒にも、り、通用もせぬ漢文にては、不都合ではあり、されば、こゝて、年來習ひ込んだ漢籍讀みの外、我が國固有の文法を知らぬ人が多いから、今日に通行する論説文は、自然、漢文體にかねば書けもせず、見る人も、感じを起さぬ故であります。又、學校の教師も、漢學じこみの人が多いから、教科書を書くにも、作文を教授するにも、專

ら、直譯體を用ふるにより、自然と、其の體が、今日の國文となつたものでありませう。それ故、徳川時代の俗を去つて、雅になつたのは、漢文體の雅になつたのであります。畢竟、徳川時代以往は、不學者が多かつた故に、文章も、耳で聞く方が多分であつたが、維新より後は、學者が多くなつたによつて、目で見ると、文が、専らになつた事と思はれます。

然るところ、近年になつて、文章は、一國の體面に拘るものであるから、成るべく、其の國固有の言詞、文法を用ひて書かねば、一國の文章にあらぬと云ふ様な論が起つて來て、通行の文體は、流暢平易になり、餘り新奇な言語は使はぬ様になりましたから、追ひくこ、目で許りて無く、耳でも分る様にな

りませうが、併し、さしあたつて、いかゞと思ふのは、裁判所の
宣告文であります。罪を犯して、宣告でも受けやうと云ふも
のは、大かた、中等以下の者でありませうから、其の宣告文を
読み聞かせられても、自分の罪は、どういふ譯で、どうされる
のか、當人には、明白に知れますまい。やはり、徳川時分の捨て
札にある様な文であれば、よく分からうと思ひます。又、近日
開業式などで朗讀する祝文も、多分、漢文直譯體であるから、
出て聞いても、私の耳の悪いのか知らぬが、分らぬ事が多分
ある。そこで、後日に、其の祝文を、印刷したのを見ることなるほ
ど、斯う云ふ義であつたかと思ふることがあります。忘かし、開
業式の祝文などは、たゞ、一時の事だから、どうでも宜いやう

なもの、成るべく、聞いて、すぐに分るやうにしたなら、宜か
らうと思ひます。又、學術の演説にも、或は、例のむづかしい漢
語が多く、殊に、翻譯家の類は、別に、一種の口氣があつて、拙陋
なる私どもには、分らぬことがあります。演説は一席の話し
であります。只今では、口で述べるばかりで無く、速記者が
書いたのが、文になりますから、是れ以て分る様にしたいも
のであります。併し、この三事だけでも、とても、急に分る様な
事にはなりません。尤も、其れも、前申す通り、追ひ／＼世間
一般の文體が、和らくなつて來ましたら、それに引かれて、
誰れにでも、分るやうにならうと思ひます。

明治三十三年十月五日 教育部省檢定 中學教科用國語書



明治卅四年十月一日印
明治卅四年十月四日發
明治卅五年一月七日訂正再版印刷
明治卅五年一月十一日訂正再版發行

刷行

編輯者

弘文館

代表者

吉川半七

發行所

吉川半七

東京市京橋區南傳馬町
壹丁目十二番地

印刷所

吉川印刷工場
東京市京橋區柳町五番地

中學國文讀本全十冊
定價每冊金貳拾五錢

中學國文讀本十の卷終

